

人よいお月様よい眺めと、斯様な事を申し合ながら、戻つて此處まで参りますると、向の方より一人の若衆姿が、月の光でチラリと見えまして御座りました、大方伏見のお城におゐであそばすお小性ならむと、其の若衆のお噂さなどいたしながら、互に近寄りましたる時に、尾花どのでは御座りませぬかと、我が名を呼ばれて叱驚いたし、怖々ながら月明に透して、顔を見ぬまゐらせました、何處やら見覚えのあるお顔のやうには思はれまするが、頓と思ひ出だされませぬので、其のまま丁寧に會釋いたして、行き過ぎんといたしますると、尾花どのの少しお待ち下され、拙者は叡山の山坊に、永らく居りました鳴之助で御座る、お見忘れて御座るかなぞと、仰せられました、其れからお身が伏見へ行かれたのを、承知して、實は其の後を追ふて、只今此れまで参つたので御座るとのお言葉……妾は強う驚きました、吊然といたして居りますると、傍より渡井が、後を追ふてお越しあそばされたとは、何にか御用がおあ

りあそばすので御座りまするかと訊ぬる言葉を、笑ひながらに打ち消れて、鳴之助疾より尾花どのに、お頼み申したき事のあつて、御座つたが、お目に掛つてお話し申す機もなく、残念に存じつゝ、其の日を過し居りましたる折から、伏見より夜舟に乗つて、大阪へ歸らんと、京の町を離れられたと聞き、此は願ふてもなき能き機なり、天の與えと勇み立ち、後を追ふて参つたので御座つたと、斯様なことを云はれながら、此ではお話し成り難ければ、身許と一所にお越しなされと、妾の手を取つて、事の次第は存じませれど、無理矢理に何方かへ伴れ行かうといたされまする無法さに、渡井が強う立腹をいたしました、妾を後にかこひ、二言三言理屈を並べまして御座りました、すると生命知らずの何んとかやらと申されながら、突然渡井の脇腹を見かけて蹴上げ而して其のまゝ手を捕つて、二間ほど向ふへ投げ出され、其れより妾の手を捕へて、無理無体に伴れ行かふといたしまするので、思はず知はず助を乞ひ

ましたる其の聲を、長門様が折よふお聞きつけ下さりまして、斯様に助けて戴きましたので御座りましたと、尾花は一部始終の容子を委しゆう物語る。聞き了つたる板倉重勝と、木村長門とは、互ひに顔を見合せつ、云ひ合したかのやうに、ホ！……と太き溜息を漏した。

『ウム……其の話の容子に依つてみれば、尾花どの、色香に、鳩之助幾時しか思ひを寄せ、今宵伏見の夜舟に乗つて、大阪へ歸ると知り、拐帯さんとて其の後を追ふて参つたものとみゆる、さても呆れ果たる不埒な奴と、重勝は只だモウ呆れ返るのみであつた。

『如何にも不埒至極な奴で御座りまする、併し尾花どの、お身に、何等のお怪我もなく、又た呼吸の音止められし渡井どのも、蘇生されたに依り、先づ先づ重勝と、重成も只管鳩之助の不埒至極なる性根に呆れ、且つ歎息してゐると、今、渡井に手當を爲すべく爲めに赴きたる二人の家來は戻つて来て、

大丈夫で御座りまする、歩むことは未だ叶ひませぬが、精神はモウ確かで御座りますれば、決して御案じあそばすには及びませぬと云ふ、オ、左様か印籠の中に間に合ふ薬が何にかあつたかなと、重勝は訊れる、尾花は有がとう御座りましたと、禮を云ふ、重成も御苦勞至極で御座りましたと丁寧挨拶するのである。

板倉勝重は何やら思案の小首を傾むげてゐたが、聽てホ、笑みながら、重成どの、拙者は午頃より伏見の城へ参り、所用を果して、戻りて御座れば、尾花どのと、召使の渡井とは、拙者が京の叔母御とやらのお邸へ、確と送り届け申す、又た鳩之助が今宵の不始末は、此れなる太刀を證據に添へ、改ためて四五日中に拙者より、大阪城へお届け申し上げまするほどに、左様御承知下されひと云へば、重成大ぬに打ち喜びて。

『然らば御手数敷恐れ入つて御座りますれど、尾花どのと渡井のこと、宜ゆ

ふお頼み申し上げまする、尙ほ拙者明日大阪へ歸りましたらば、鳴之助が今宵の不始末を、上様へも又た頼包様へも申し上げて置くで御座りませうと重成は茲に重勝に別を告げ、又た尾花にも別を告げて、山城屋へ引き返す折から又た薄き黒雲は現はれ來たつて、冴え切つてゐた月に薄絹を被せたかの如く、南へ南へと斜に走つてゐた。

眞野豊後守頼包の息女尾花と云ふは、今年十五の半開の花、天の爲せる美しき容顔は、何に喩へん方もなく、眼元口付髪的光澤、何に一つ批難すべき處はない、加之ならず天性賢明にして、文學の、たしなみ殊に深ふ女藝にも十分に達しゐたれば、尾花の名は豊臣家の家中に響きて、豊後守どの美しき玉を得られて、お羨やましき儀に御座ると、追従ならぬ心底より云ひ出る家臣も、澤山に在つたのである。

鳴之助は二三度尾花の顔を見て、早くも思を寄せたが、自分は今云は浪人

の身の上へ、幾許尾花に心を寄せてみたところが、所謂高根の花にて、手の届きやうがない、唯だ徒らに心を悩ませてゐた折から、フト京の町にて尾花の姿を認め、町の端まで送つて行つて、別を告げた下僕を呼び止めて、尾花のことを秘と訊れたれば、何んにも知らぬ下僕は、今夜夜舟にて大阪へ歸られるので御座るとの事を、云ひ聞かせたので、大阪へ歸つて仕舞ふては逢ん折もない、如ず後を退ふて引つ捕へ、思ひのたけを云ひ寄るにはと、斯くも無法な考えを起し、戀の暗路を走りつゝ、淀川堤にて不埒な所業に及ばんところを、天は妾に人を苦しめず、圖らずも重成が尾花の揚げし悲鳴を聞きつけたので、左てこそ何事もなく濟んだのであつた。

○住の江の秋遊び

大藏局は今しも淀君のお傍の御用を濟せ、お暇を戴きて静かに立ち上り

三の間よりお廊下へ出た時に、臯月と云へる侍女が後を追ふて来て、局の後に跪きつゝ、両手を突き立て。

『お局様へ申し上げますると、丁寧な聲を掛ける。』

何んじや……何に御用……と、立ち止まつて臯月の顔を優しく眺める。

『アノ我が君様が、お局様に何にやらむ、申し入れたき事のおありますやの由に御座りますれば、御前へお伺ひのほど願はしゆ存じまする。』

『オ、左様で御座りましたかと、大藏の局は静かに打ち黙ひて、其のまゝ淀君の御前へ引き返へすのであつた。』

『他事ではなけれど、山瀬が甥の鳴之助とやら申すもの、永らく叡山の山坊に小性を勤め居りしに、何にやらむ犯せる罪ありて、浪人いたし居る折から、此のほど伏見街道にて、豊後守頼包が娘の尾花とやらを、惱めやうとせしを岡成の爲めに懲られしとのことなるが、この事其方知つてやかな、先づ其の事

を聞ふと思つてじやわいのうと、淀君の言葉

『其の事に御座りますれば、二三日前に重成殿よりも承はり、又た昨日

内藏助が、上様の御前に於て承はつたと申して、妾に語り聞かして御座り

まするには、京都の所司代板倉伊賀守様より、鳴之助が其の節、重成殿

に切つて掛りしと云ふ太刀を證據に添えて、重役方までお届けが御座りまし

たとのこと、其れゆへに妾も實は餘りに大それたなされ方と、只だモウ驚

ひて居りましたして御座りまする。

『其れでは鳴之助とやらの不埒は、真じやなと、淀君の顔は倍度なる、重役

方も強う呆れておゐであそばす氣に御座りまするし、又た此れもお噂では、御

座りまするが上様に於せられても、殊に御立腹又た豊後守様も御立腹の御容

子に御座りますると、局は申し上げる。

淀君は聞き了られて、何にやら御思案の小首を傾むけて居られたが、其れは何

れにいたしても不埒至極のことではある、其れでは其方下りやつて、且元が未だ御前に居るやうならば、此れへ罷り出るやうに云ふて呉りやれぬかと、淀君の言葉は重々しい。

大藏の局は、素より淀君の意中を知らふ筈がなければ、訝かりながら、委細心得て御座りますると、其のまゝ退がつたが、此の時は未だ未の刻前とて片桐且元は桐の間の重役溜にて、今しも御前より下がつて、茶を喫みながら休息してゐた、ところへ波邊内藏助尙が、母の局の云ひ附けにて、淀君の仰せを取次だから、且元は如何なる用事かは存せれども、淀君のお召とあれば、猶豫ならじと、其のまゝ静々と大奥へ出仕した。

『御事様には、何にか御用おありあそばすとの由、只今大藏の局より取次に依つて承知いたし、取敢ず伺候いたして御座りまする。』
淀君は優しゆふ打ち黙かれて、近ふ寄つて呉りやれ、少し其方に話したきこ

とあればと云はれる、然らば御免あそばされて下さりませと、且元は三の間より、二の間と上段の間の関の際まで進み寄る。

『他事ではなけれど、山瀬が甥の鳩之助とやら申す者、過る日伏見の於て頼包の娘に不埒を仕掛け、又た重成に切てかゝつたとか申すことじやが、左様かなど、仔細あり氣な面貌にて訊れかけられる。』

『御意に御座りまする、拙者重成より委細の話を承はり、さてさて情なきことを、長曾我部殿の顔汚しと、存じ居りましたる折から、一昨日京の所司代、板倉伊賀守殿より、表向に證據の太刀一振を添へ、お届けて御座りました、併し豊後殿の息女に怪我もなく、又た重成に怪我也も御座りませなんだに依り、鳩之助の在處を探索いたして、吟味するにも及ばずと、斯様に存じ一同が御前に於て、心得て置くと云ふことに相談を定めました御座りましたなれども御事様、長曾我部殿の不面目は、此の上もなき儀と存ぜられ、我々

一同除るにお氣の毒の御事とお察し申し居りまする儀に御座りますると云ふ。淀君は默然として、唯だ太き溜息を突くのみなりしが、稍あつて何にやらむ決心の色を顔に漂へながら、其れでは其方と言葉を改ため。

「其方も棄殿より承はつて、承知いたされて、あらふが、實は山瀬より先頃鳴之助も今年は十八歳、叡山に於て文武の道か、幾分を磨き居りました氣に御座りますれば、表方のお小役に、お召し抱へ下さりまするやう、お願いあそばされて下さりまするやうにとの、懇々の頼みであつたので、其の由を棄殿にまで、申し入れて置ひたが、併し其様な不都合な者にては、御奉公は相成るまぬ、其れ故に其方より改ためて、鳴之助採用の儀、相叶はぬと長曾我部盛親へ申されて呉りやれぬか、山瀬へは妾より改ためて申し聞かするほどにと云はれる。

「心得て御座りまする、御事様より其の御誼、お伺ひいたしませいで

其の様な不都合な者は、豊臣家の御名折に御座りますれば、決して召し抱えらやうな相談はいたしませぬほどに、御安堵あそばされて下さりませ、淀君は靜かに打ち點かれる、且元は御事と重けて言葉を改ため。

「此れは他事で御座りまするが、斯るお噂の御座りましたる折から、お心得るまでに申し上げて置きまするが、山瀬どの内後見と云ふ肩書と、御事様より一方ならぬ御寵を辱けなふせるを、憚りながら鼻にかけ、左右に面白からぬお噂が、御家臣中に御座りまするを、拙者承知いたして御座りました、斯ることは素より些事、賢しゆふても何處やら分別の足り申さぬ女性のいたされ事と存じ、格別氣にも掛けませす、又た御事の御耳へ入れて、御氣色を損するにも及びませぬ儀では御座りますれども、併し面白からぬお噂が、御家臣の中に生りまするやうでは、自然御家の御不爲と相成りはいたすまじかと斯様に存じられまするので、お序と申し上げましては、甚だ恐れ入り奉り

まするが、山瀬どのに然るべきやう、おたしなめのほどをお願ひ申し上げとふ存じますると云ふ。

『山瀬は、其の様な不都合な心掛にておじやるかと、淀君は少しく色をかえられるのである。』

『一人ならぬ方々が、山瀬どのの事を面白くない、お噂さいたされますれば、火の無き處に煙は揚らずとかや、兎も角もお含み置きのほど、宜しゆお願ひ申し上げますると云ふて、且元は其のまゝ御前を引き下り、其の翌日桐のお溜に於て、長曾我部盛親に、會ひたる時に、鳴之助採用の儀は、淀君のお言葉もあり、上様に於せられても、相成らずとの御説で御座つたから、此の儀御承知置き下されひと云ひ渡したが、素より鳴之助が身から出でたる錆なれば、今更何んと云ふべき言葉もなく、面目を踏み潰して、其のまゝ閉口垂れたのであつた。』

其れより四五日を経て、淀君は山瀬をたいなめられたと見えて、其れからと云ふものは、山瀬の顔が奥御殿に見へなくなつた、此れは淀君より遠慮せよと云はれて、其れで邸に引き籠り、謹慎いたし居るのと察せられるのである。

左右する中に其の年の春も過ぎ、夏も暮れて、世は秋の中旬とは爲つた、淀君には恒例に依つて、住吉神社へ参詣なし、而して住の江の秋景色を賞せらる何にがさて、秀頼殿の御生母として、其の権力殊に高かりし淀どのの御遊山なれば、其の儀式殊に殿めしい。

當日淀どののお供は、大藏局左京局を始めとして、侍女三四十人、其れに大野治長大野主馬などの、淀どのに殊に氣入の人々、其れから此の時まで閉門謹慎の體であつた、長曾我部夫婦も、亦た閉門を許されて、淀どののお供の中に加へられたのであつた。

其れから大阪より、住吉に至る街道筋は、若手の武者に足輕を多く引き連れ

させて、警固させられることゝなつた。
 初役と云ふ次第ではなけれど、若手の武者に警固の役を仰せつけよとの命令、殊に住吉より住の江の一體は、木村長門守重成に、仰せつけよとの、淀君が特別の命令であつたので、之を承はつた重成は大めに打ち喜び、晴れの初役、大切にいたされれば相成らむと、勇み立つ、左京局も淀どのが特別の思召、木村家の面目と非常に喜んだのであつたが、此の住の江の秋遊びに、思ひ掛なき難題の湧き來たつて、一方ならぬ迷惑を蒙るならんとは、智勇兼備の重成も、神ならざれば氣附なんだのであつた。
 淀君は春秋の二季に、郊外の遊びをされて、其の一日は召使の侍女一同に、無禮講の遊をせよとお許しが出る、左れば女達に取つては、此の一日は半年中の生命の洗濯、云ひたい事を云ひ、食へたい物を食べて、打ち興するも、何等のお咎もなく、又た局方を始め取締の老女方も、侍女ど

もが如何に戯れ居るも、男を相手にせざる限は、決してたしなめはせぬ左れば此の一日は侍女どもに取つては、此の上もなき嬉しい日である。
 お午のお辨を戴き、甘き御酒まで戴きたるより、何れもホンノリと酔が廻つて來た、其れでお許しが出てゐることだからして、各手に面白ひ話をしてゐたが、段々と調子が乗つて來て、殿子の噂が出たした、ヤレ誰れ其れは、脊がスラリとしてゐるの、誰は優しいお顔付なれど、強みがないとか、イヤ斯ふだの彼だのと、家臣の若手の月旦に夢中となつて、キヤツ……キヤツと云つてゐたか、愈々誰が一番に美しくくつて、好い殿子か、定めませうと云ふことに爲つて、其の軍扇は申し合したやうに、木村長門守重成に揚つた、此の容子に依れば重成は美少年中の美少年であつたとみえる。

○淀君重成に盃を賜はる

譯もなき殿子の月旦を、無上の快樂として、今日ばかりは誰に遠慮も砂松原、嬉しがり切つてゐたる折しも、淀君の寵愛を辱なふしてゐた、侍女中にて一二を争そふ美人の聞え、殿中に隠れなき、皐月と云ふ十九の盛りの花が幕の傍にて見へましたぞえ……見えましたぞえ、今に近ふ來られますほどに、篤くりと堪能するほど、御覽なされませと、優しい聲を振り上げて騒きたつるので、見えましたとは、何にがで御座りまするぞえと、二十四五に爲るのが云ふ。

『さてもお察しの悪ひ、畫に在るやうな殿子のお越しで御座んすわいな、ソレソレ……モウ其處へ……カ、ホンニ、長門様が今日こそは、誰に氣兼ねも御座りませれば、篤りとお顔を見せて貰ふで御座りませうわいと、十八九より二十五六位ぬまでの女ども、十七八人が、宛然子供のやうなことを云ふて騒ぎ立てゝゐる。

我が身のことを此の様に、女中等が噂さし合ふてゐやうとは、如何で知らふ筈なき重成 今日晴の場處晴の役向なれば、髪も殊に念を入れて結び、化粧は素よりしやう筈なけれども、天の爲せる美貌、紅顔は、櫻と海棠をこれ合せ、一つの瓶へ挿したるよりも美しく、心なき者は兎も角も、心ある者の目には、美しき眺ぞと思はぬ者はない、況して奥殿ふかく男子氣のなき處に、仕ける女性の目には、又た一入に美しく眺められるは、更々無理ではない。

木村長門守重成は、此の邊一體の警固を、特に命ぜられたのであるから、役向の手前萬ヶ一にも、落度あつては相成らずと、今しも濱邊よりして靜かに打ち興じて居らるゝ、幕外を見廻りつゝ來かゝつたのである。

ブーツと奥に大藏局と、七八人の侍女とに取り巻かれて、甘き御酒を召し與がられづゝ、打ち寛ぎて居られた淀君が、幕端にて若き女達の俄かにキヤ

ツ……キヤツ……と騒ぎ立つる其の容子を、早くも御覽じられが、不審の眉を顰めつゝ。

「何にを、アノ様に俄かに騒ぎ出せしか、けたまはしいと云はれると、傍にゐた老女が其れへ来て、靜かにしやらぬか、我が君御の御誕で御座るぞえと、たしなめば……ナニ長門様が向ふより見へたので、騒ぎ立てたと、オホ、……お若ひ方々の、さてもおぬぢらしいことわいと、云ひつゝ老女は元の座へ歸つて、此の由を淀君に云ふ。

「ナニ……長門が来やつたとや……オ、丁度幸ひ、遠慮はぬらぬ許すほどに此れへ召しや……と、淀君の上意に、若き女どもは山海の珍味を戴きしより、尙ほ嬉しいと云はん許りの悦びにて、インインと勇み立ちつゝ、皁月と外に三人ほどの優しの花は、早くも幕の外へ飛び出した。此の時重成は、幕外半丁ほどの處まで、歩み來たつたに、侍女が何れも

酒を戴きしとみえて、揃ひも揃ふて眼の縁を、ホンノリと櫻色に爲しつゝ、我が行手の方に立ち塞がり、自分の近寄るのを待つてゐるやうな容子であるので、不審りつゝ、そのまゝ片方へ殊更に道をそらせた、すると其處へ足早やに駆け來たりて。

「長門様、御前様がお召で御座りまするほどに、早うお越しあそばされませと口を揃えて云ふ、ヒタリと其處へ大磐石のごとくに立ち止まりたる長門守重成、不審の眉を動かしながら。

「何んと云はるゝ、御前様が此の重成をお召しとなと、云ひつゝ涼しき眼を、玉のやうに光らせながら、優しゆふ一同の顔を眺める。

「御前様には、お身様のお越を御覽あそばされて、召せとの御上意で御座りませるほどに、サ、早うお越しあそばされませ。

「なれども、其方達、御幕内への御上意、御座りませるなれば、長門直に

お請け申し上ること、些と出来かれますが……と云ふて思案する。侍女達は互ひに顔と顔とを見合せつゝも、氣の利いたる臍月は、其れでは長門様には、御前様の仰を御不承知と云はれるので御座りまするか、御前様がお身様に、御用おありあそばすとの御謔に御座りまするに、お請けいたすこと出来ぬと仰せらるゝは、御無禮では御座りませぬかなと、眞甲より切り込まれたので、長門はグー……と返答に窮した。男子の幕内へ入るは作法にあらずと、重成は考へたが、御用とあつてみれば時に臨みて如何なる急用の出来ありしやも圖られず、左るを作法にあらずと云ふて拒むは、子臣の分にあらず、殊に淀君のお傍には、我が母もおはすことなればと、斯様に考へて、然らば兎も角も伺候いたすで御座らふと、重成は快くはあらねど、無禮の一言にグーと詰りて、不承無承に承知したので、侍女どもは大喜び、サアお早うお越しあそばされませと、手を捉へ脊を押んば

かりに、一同が重成を取り圍みて帳の中へ誘ふた。鬘斗目の小袖に、白と紫の配合を程よく爲したる上下に、一層の艶を添へたる長門守は、帳の内へ入つてみると、百花爛熳とも云ふべき、女ばかりなれば、忠魂義膽を以て固められたる重成も、流石に年が年、處女氣のうら蓋かしゆふてか、雪の顔にハツと時ならぬ薄紅葉を散した。其れが又た一入の美しくさ、艶々しさであるので、若き女どもには格別の戀想を起したらしい様な觀を呈してゐた。重成は帳の内へ入るや、我が母やおはすかと、先づ第一に四方の容子を窺ふたが、母なる局は何處へ赴きしか影たに見當らない、ハテ何處へ行かれたのかと、思ふてゐると、其處へ大藏局が出て来て。『此れは重成殿、ようこそ御伺候下されました、我が君様にも、強う御満足に御座りますると、先づ言葉を掛けた。』

重成は大藏の局が出て来ての此の言葉に、好き機とや思ひたりけむ、其れへ
ピタリと坐りて兩手を突きつゝ。

「此れは大藏の局様御座りまするか、今日は我が君様のお供、何にかと
御苦勞千萬の儀に存じ上げまする。」

「お身様こそ外々の御警固、お骨折のほどお察し申し上げますると云ひつゝ、
重成の容子を優しゆふ眺めて。」

「御前様が、特にお身様をお召して御座りまするほどに、御遠慮なく近にお進
みあそばされませと云ふ、重成迷惑そふな容子にて。」

「お奥の方々のおぬであそばすお席へ、罷り出るさへ恐れ入つて御座りまする
に、御前様のお近くへ寄れとは、恐縮至極に御座りまする、如何様なる御用
に御座りまするやら、お身様よりお伺ひあそばされて下さりませと、重成は
兩手を突き進もふとはせない。」

先のほどより彼方に設けられたる上段の席に、打ち寛ぎ居られた淀君は、過
されたる酒に、ホンノリと顔に櫻を散せつゝ、艶々しき長門の顔を眺めて居
られたが、此の時に。

「長門……許すほどに近寄りや、今日は無禮講じや、其の斟酌には及ばぬ
わいな、寄りやと云へば寄りやと、淀君の聲は最も涼しく、最もやさしいので
あつた。」

「ハッ……と云ひたるのみにて、重成は餘りに畏れ多ければと云ふて、頭を
下げたるまゝ、ビリビリ動もせなんだ、淀君は其の容子を、ツク／＼と見や
りながら、進みや進みやと、尙も云はれる、なれど重成は依然として動かぬ。
大藏局は、折角の淀君が御興の折から、御氣色を損じては、重成の爲めに
宜しからずとや思ひけむ、静かに重成の傍に寄りて。」

「長門どの、御前様が折角のお言葉、御辭退申すは怖あり、兎も角も近ふ進

まれび、其の中には右京どのも戻つて來らるゝほどに、御遠慮申すには及ばぬわいと、傍より取り爲す、此の時右京の局は、淀君の仰せを承はつて、住吉のお社へ、何事をお祈り上げに赴いてゐたのである。

『左様なればお畏れ多きことに御座れど、お許しあそばされて下さりませと、重成は淀君のお傍近くへ進み寄る、淀君の機嫌は又た一入にて。』

『長門、この春初めて顔を見た時より、僅か半年経つか経ぬ中に、強う成人しやつて、天晴れ立派な武夫に爲りやつたのうと、淀君如何なる感想を腦裡に抱かれたか、さつても不思議、妖艶かなる風情にて、重成の顔を見惚んばかりに眺められつゝ、斯く云ふて更に言葉を改ため。』

『又た今日は面倒なる役向き仰せ付け、御苦勞に思ふぞやと、又たしてもお優しいお言葉……重成は兩手を突きたるまゝ、有難き御誼、恐れ入つて御座りますると、お禮を云ふ、而して何にやら御用ありあそばす氣に承はつて御』

座りまするが、御用の御次第仰せ聞かされて下さりませ。

『先づ其の用事は、緩々と話すほどに、打ち寛ぎて休息しや、其の中には右京も戻らふほどにと云はれて、其方、長門に盃とらせい。』

重成は所謂有がた迷惑と云ふ體にて、大藏の局に向ひ、御前様の、身に餘る有がたき御意、此の上もなく有がたと存じまする、併りながら拙者酒は殊に不調法、お局様より宜ゆふ申し上げて下さりませと云ふを、淀君は何んと思ふてか。

『長門、其方が今日の役目大儀と思ひ、聊かながら慰めやうと思ふて遣はす盃一つ二つは過すが可い、今日は一年に二度の遊山、その斟酌は時に取つて不忠ぞやと、淀君の言葉は少々無理である。』

不忠と云はれては、返す言葉がないから、左様なれば遠慮なふ、頂戴いたすで御座りませうと、據處なくお請をいたす。

大藏の局は靜かに打ち點ひて、折から其の傍に侍へつてゐた臯月に、目配をすると、氣の利いた彼は、直に土器を三方に載せて立ち上らんとすると。

「待ちやツ……と淀君の言葉……續いて其の盃此れへ持ちやと云はれる、大藏の局は何に感じてか、はてなと云はん許の風情にて、シロリつと淀君の顔を盗むが如くに眺める、臯月は云はるゝまゝに、其の盃を淀どのの前へ直す、酌しやれとのことに、大藏の局は有りあふ銚子を取り揚げて酌をする、淀君その酒を三口ほどに飲み干して、これを重成へ遣はせと、其の三方を靜かに押れる。

大藏の局はこの言葉に、思はず知らず不審の眉をがめたが、早速に何にやら得心のゆきたるか、軽く打ち點きて、自ら其の三方を取り上げて、重成の前へ持ち行き、下に置きて。

「長門どの、御前様のお口をお附けあそばされたこのお盃を、お身に下さる

よとの有がたき思召し、こよなきお身の面目、辱けなふお請けなされませやと云ひつゝ、信度重成の顔を眺めて、元の座へ戻つたが、其の顔を信度眺めたは、このお盃は如何なることあるも、お請け申してはなりませんやと云ふことを眼にて知らせたのであつた。

此の頃大阪城内の控にては、男女が互ひに口をつけたる盃を取り交すは夫婦親子の仲にあらざれば、兄弟仲に限られてあつたので、若し他人の男女同士が取り交せば、假し意中は兎も角も、其れにて秘密の契約が取り結ばれたるものとされてあつた、其れ故に口をつけたる盃を、他人同士が取り交すやうなことは、決してせなんだ、然るに今口をつけた盃を、淀君より下されたので、大藏の局は注意までに、目で物を云はせたのである。

此の位のことば、大藏の局の注意なくとも、重成は能く知つてゐる況して年はゆかれど、其の物堅きこと、金鐵も音ならぬ彼れ、殊に淀君よりの下され

物なるより、愕然として打ち驚き、胸の動機を高めつゝ、呆れ返へつた、又た居合す侍女達も、口へ出しては素より云ほふことのあるべき筈なけれど、互ひに顔と顔とを見合せて、思はず顔の色を變たるは、淀君の此のなされ方に轉だ心を動かしたるものとみえる。

卓月は銚子を持つて、重成の傍へ行き、その土器へ波々と酒を注ぎて、サア長門様、召し上りあそばせませと云ふて、銚子を其處へ置きたるまゝ、元の座へ歸る。

重成は兩手を突き、シロリと淀君の顔を見上げながら、最と殿かなる音聲にて。

「御前様の有難き下され物、重成身に泌て辱けなく、何んと御禮申し上げて宜しきやら、唯だ唯だ感涙に咽ぶのみに御座りまする、なれど御前様このお盃、頂戴いたしましては、重成城中の掟に反き、上様に對し奉り何ん

とも、お詫の申し上げやうも御座りませぬ、又た母の右京に對し申しても、孝道に欠ける儀かと、憚りながら存せられまするに依り、山よりも高く海よりも深き、御前様の御厚志に反きまする段は、重々恐れ入つて御座りますれど此のお盃の儀は、御辭退申し上げ奉りますると、木村長門守重成は、憚かるるところなく、音頭爽やかに、キツパリとお斷りを申し上げたのである。

「長門は強う物堅ふおじやるな、自が口をつけて取らせやうとせしその盃城中の作法なればとて、辭退いたすとは、年に似合ぬ、さても頼もしい鐵石心自も棄殿(秀頼のこと)又たとなき善き家來を有たれたと、嬉しゆと思ふぞやと、淀殿の御機嫌損するかと心の中心にて、強う察じてぬた太藏の局も、この言葉を聞き、ホツと胸を撫で下して安心した。

なれど、長門、作法は作法……此處は殿中ではない、物見遊山の保養場處じや棄殿と其方とは、乳兄弟、其れゆへに自は棄殿と同様、其方を我が子のやう

に思はれて、何んとなふ懐しい。其れゆへに今日の役目を慰さめやうと思ひて、此れへ呼び入れ、心をこめて遣はしたる盃じや、其の斟酌には及ばぬほどに、飲みや過しやと云はれて尙も勧められる。

斯ふ云はれてみると、道理は道理、一應は尤もなれど、作法は作法……何んと優しゆふ云はれても、此の盃を受けることは出来ぬから、重成は決心の臍を固め、何んと仰せ給はりますも、このお盃は……と、重れての挨拶未だ終らざるに、そのお盃、妾が長門どのに、お戴かせ申すで御座りませうと、云ひつゝ片脇の緞帳を靜かに開けて、入り來たる女があつた。

○山瀬の奸策重成を苦しむ

重成は何方かと驚きながら、思はず知らず顔を上げて見れば、豫てより面白からぬ心根の人、又た鳩之助の眞の叔母御なりと、聞き及んでゐた、長曾

我部盛親の室の山瀬であつたのである。

山瀬は鳩之助が不埒より、御前體不首尾と爲り、又た鳩之助は、再び世に立つことの出来ぬ日蔭の身と爲り、味氣なき月日を送つてゐる、此れに反して長門守重成は、重く用ひられてゐるのみならず、表方重役の方々は、申すに及ばず、上様の御寵愛も一方ならず、且つ又た大奥にても、重成の評判が殊によく、宛然旭日昇天の勢である、左れば随つて右京の局の鼻も高く、右京殿は可きお子を持たたと、人々に持てばやさるゝを見るにつけ、聞くにつけ、山瀬は甚だ面白くない、其れで其の性質のすれくれ者なる山瀬は、太く重成を羨んだ、羨むと同時に、妬しいと云ふ反動を生して來て、好き機あらば重成を失策らせ呉れむと、不埒な考えを抱ひてゐたのであつた、折も折、時も時なり、あられもない淀君が、過せし酒の上の興かは知られど、美少年中の美少年たる、重成の紅顔に心を動かせてか、自ら盃に口をつ

けて、其れをそのまま重成に與へやうと強られるのを、緞帳の蔭にて篤と窺ひ知りて、此は好き機なりと思ひ、一は淀君の歡心を買ひ、二つには之を楯に重成を失策さんと、早くも邪惡の知叢を絞りにて、其の盃を取らせませうと云ひつゝ出て來たのである。

神ならぬ重成は、斯る邪謀を山瀬が抱き居らふとは知らないなれど、大藏の局は流石に賢婦人の聞え高き女性だけあつて、早くも山瀬が邪心を看破し、長門どのの身の上に、一大事ぞと合點したが、左あらぬ體にて、シツト山瀬に其の涼しき眼を注いだのであつた、其の中に山瀬は淀君に挨拶して、靜々と重成の傍へ進み寄りて、ビタリと坐りつゝ。

「長門殿、暫らくお目に掛りませぬ中に、強う御成人あそばされ、見違えるほど立派に御成りなされましたなと、先づ會釋する、重成は無言にて兩手を膝に置きたるまゝ、軽く點くのみ、山瀬は引き續きに。

「長門どの、御前様がお身の今日の御役目を、御苦勞と思召されて、お心を籠めさせられて、下し賜はりたるこのお盃、何故あつて有かとう頂戴いたされませぬか、御前様の有がたき思召に反きやるとは、お身御前様をさげすさみて、御座りまするか、御無禮で御座りませうがなと、山瀬そろくと毒蛇の炎を吐き初めたのである。

「山瀬様、何んと仰せられまする、御前様をさげすさみてと仰せられては、長門この上もなき迷惑千萬に御座りまする、有がたき此の御盃を、心ならずも御辭退申し上ぐる長門が心底、改ためて申し述べませひでも、山瀬様には、能ふ御存じでぬらせられまする筈と、重成はシロリと彼の顔を眺めながらに云ふ。

山瀬は靜かに打ち黙ひて、ホ、笑みながら、如何にもお身が御心底、妾能ふ存じて居りまするわいな……

「御存じて御座りまするならば、さげすみてゞだとか、御無禮であらふなぞと仰せられては、其りや重成をおからかひあそばされると申するもの、この上もなき迷惑に存じますると、云ふ顔は山瀬はツクぐと眺めながら、お身の御心底、能く存じ居りますればこそ、お受けあらぬは御無禮であらふと、申し上げたので御座りまするわいな……」

「何んと云はるゝと、重成は意外の言葉に、顔色を變へたが、元來堪忍の強き重成のことなれば、ムツとしたけれど、忽ち心を取り直して。」

「此れは又た山瀬様、御遊山の御座興とは申しながら、年波も行かぬ某をおもちやにあそばすので御座りまするか、云ひつゝニタリと笑ふ。」

「此れはしたり何に仰せられまするぞへ、不束ながら長曾我部盛親が室の山瀬、お年のゆかぬお身を、おもちやにするなぞと云はれては、御前様のお聞え又た方々の思召し、山瀬強う迷惑いたしまするわいな、左様なればお身が有が

たき、此のお盃を御辭退あそばす、其の御心底、憚りながら此れにて、申し上げるで御座りませうわいな、お身は殿中の作法もあり、二つには餘り恐れ多ければと云ふて、御辭退あそばされますが、其の實は豊後守殿の息女、尾花どのに對しての、義理立て御座りませうがな、エ、ツ……此の言葉には、流石の重成も沸然とした、大藏の局も色を變た、淀君は不審顔にて、二人の容子を眺と眺めておられる。

「お身は何にも知らまぬと、思ふて、御座らふが、尾花どのはお身の優しいお姿に、心を寄せて居らるゝ、お身も亦た尾花どのの、色香に、心を寄せて居らるゝ、其れゆへに身に餘る面目の籠りたる、此のお盃を、御辭退なさるゝので御座りませうがなと云ふ。」

尾花が重成に心を寄せてゐたのは事實である、併ながら重成は尾花を慕ふはさて置き、念頭にて置いてはぬなかつた、然るに今、山瀬が斯様なことを云ふ

は、伏見にて重成が尾花を構ふたるを根に有ちて、而して尾花が重成に心を寄せてゐると云ふ噂を、チラリと耳に挿んでゐたので、其れで思ひ切つて、出鱈目を云ふのであつた。

淀君の御前をも憚からず、根も葉もなきことを云ふ、さては山瀬、鳴之助をたしなめたる一條、又た御前體の首尾を損じたるを根に持ちて、拙者の名を汚さんと企たてよつたるか、己れツ……憎くき女、とは思ふたれども、飽までも左あらぬ體にて、アハ、……と故意らしく軽く笑ひつ。

「此れは思ひも寄らぬ御難題、さては山瀬様には、重成をおおじめ……イヤナニおなぶりあそばさず、御所存と見えまするな、アハ、……譯けもなきお戯れと云ひつゝ、長門は其れへ兩手を突きて。

『御前様、今日の辱けなき大御心は、長門心膽に徹して、夢忘却は仕つりませぬ、又た此の御盃を御辭退申し奉りまする、重成の心底、何んと

ぞ幾重にも御推察のほど、願ひ上げ奉りまする、尙ほ又た濱邊を御警固申し上げ居りまする、足輕ども、某の姿の見えませぬに、或は案じ居らむも圖られませず、旁々お役目の手前、萬ヶ一にも落度御座りましては、御前様を始め上様に對し奉りまして、恐れ多きことに御座りますれば、此れにてお暇の儀、願ひ上げ奉りまする、と云ふ顔を淀殿つくぐと打ち眺められながら、稍や御不興の體にて。

『其れでは長門、何うあつても其の盃は……と、淀殿何んと思召れてか、尙ほも執念仰せられる。

『恐れ入りたてまつりまするが、お家の御作法を、臣子の分といたして……と云ふを、山瀬は皆まで聞かず、何んと思ふてか、ズーツ……と重成の身邊近くへ進み寄り、一癖あり氣な眼付にて、大藏の局の顔を眺め、而して直ちに重成に向かひて。

「御前様が、彼れほどまでに勿體なくも、優しゆふ仰せられまするに、お身はお家の作法……拵と云はれて、何處までも尾花どのに、心中立いたさるゝ思召して御座りまするか、その様なお心ならば、妾が御前様に成り代り此のお盃取らせませう……イヤ何に取らせいで置きませうやと、山瀬は無法……波々と酒の注れてある、其の盃を右手に取り上げて、コハ什麼に、力づくにて重成に飲ませんと、口元へ持つて行く、この場所柄をも辨まへぬ言語道斷なる山瀬の舉動に、流石の重成も耐へかれてか、バツと顔に眞紅の色を染め出しつゝ、口元へ持つて来た、山瀬の右手をグヒツと握つて。

「山瀬様、場處柄も憚からず、年少の者と侮りて、餘りなる御無禮な致されかた、御遊興もよきほどにいたされ下され、と云ひつゝ靜かに突きやつた、力量の優れてゐる重成に、グヒツと握られたので、可弱き山瀬の手はしびれて、アイタ……タ、タ、タ……と云ひながら、其の土器を其處へ、バツタリと落した

から墜らない、酒は四方に飛び散る、土器は割ける、實に落花狼籍の體である、山瀬は痛さに顔を皺めながらも、尙ほ飽き足らずの口。

「長門殿、大それた御前様より下されしお盃を、お割りめされたなど、何處までも、すれくれた鬼薊、匿せし刺を出さんとするを、先の程より見るに見かれ、聞くに聞きかれてゐた大藏の局はモウ耐へかれてか、靜々と山瀬の前へ進み出で、山瀬どのと、聲は小さけれども、心膽より出で、か、廣き帳の中一ばいに泌み渡るやうに響くのである。

「此れは大藏のお局……何にか妾に御用御座りまするか、何處までも毒々しき口上振なり、ハイと大藏局は居住居を直し。

「お身様は、御前様をも辨へられず、長門殿をお相手のお戯れ、失禮ながら些とおたしなみ下さりませ、深く決心せることのおつてか、ハツタと山瀬の顔を睨みつけたのである。

「此れは又たお局には、強ひ御立腹、オホ……オホ……オホ……何に
 が戯れて御座りまするか、その仔細……サア承はるで御座りませうわいと
 山瀬はキリツキリツと皆を釣り上げ、裾裾の兩鈴を持ちて、一膝前へくり出
 でたる其の面構、さても恐しき女なり。」

「其の仔細申し上げませうわいと、局も負てはぬぬ、あわや兩女の中に一條
 の争ひが、生ぜんとする、此の時早く彼の時遅く、傍の緞帳を靜かに押し
 除て、此へ現はれ出でたるは、長門が母の右京の局なり。
 局は先づ程より、淀君の仰を承はつて、祈を上げて戻つて來た、而し
 て緞帳の隙間より、我が子の重成と、山瀬とが押し問答せる容子を、チラリと
 見ぬ、太く仰天せしが、仔細のあることならむと思ひたれば、其のまゝ緞帳の
 小陰に身を潜め、耳を時たてつゝ、一部始終を聞ひて、いよいよ驚くこと一
 方ならず、ハテ何んとせむと、左つ右つ思案に胸を痛めてゐたところへ、大藏

の局が我が子の身を思ひやりて、あわや山瀬と一と争ひ生さんとするにぞ
 今は猶豫ならずと、其れへ現はれ出でたのである。

「オ、母上と、重成が右京の顔を眺むるを、局は見向もやらず、ズカ／＼と
 我が子の傍へ摺り寄つて、左手に重成の襟元を握つて押へつけ、右手に持ちた
 る扇子にて、丁々ハツシと叩きながら、聲震はせて。

「此な不忠者奴ツ……右京は其方のごとき、不孝な子は生ぬツ……此處を何處
 と心得居る、男子の入るべき所ではない、上様のお許もなきに、奥向の
 方々が居らるゝ、而も畏れながら御前様の御座あそばすお傍近くへ、罷り出る
 とは、お家の掟を破る不届者ツ……性根腐り奴ツ……と尙も丁々／＼と叩
 く、右京の心は涙に満されてゐるのであつた。

「此りや右京、其の様に手荒ふしやるな、妾が許して呼び入れたのじや、長
 門の知つたことではない、モウ堪忍してやりやと、淀君は右京の言葉と、手荒

ひ折檻とに、ア、悪かつた過までりと悟られてか、斯は優しゆ云ふ。ハツ……と鶴の一聲、右京は折檻の手を緩めつゝ、両手を突きて其れへ平伏つゝ、恐れ入りましたる御前様の御詮……と云ひながら、何にやら申し出でんとせるを、大藏の局は氣轉を利かして。

『右京どの、御前様が折角の御詮、長門どの、御折檻は、モウ其のまゝにて置かせられませと、云ひながら何にやら眼にて物を云はせる。

『長門、御前様が有がたき只今のお言葉、又大藏殿が、お取り爲し。かたがた此のまゝ許すべきではなけれど、今日御前様御保養の折からなれば、御内分にてお濟したまはるやう、母より後にて改ためて、お詫び申し上げ置くほどに、サ……早う下りや。

恐れ入りました御座りますると、重成は改ためて淀君に御挨拶を申し上げ、更に大藏の局にも叮嚀に會釋し、母にも一禮して帳の外へ出た、而して衣紋

を繕ひ、打擲されて亂れたる、鬢の毛を撫で上げ、其れより再び警固の役向を、殿かにお勤め申したのであつた。

○思ひも寄らぬ嫁御の話

山瀬は重成を、御前體を不首尾にさせしめやうと思ひしが、却つて此れが爲めに、奥向の侍女達までにも、山瀬様はお人が悪ひと憎まれ、而して重成に寄する同情が、一層に高まつた、又た重役の方々も、此の事を聞きて、山瀬の心根を苦々しきことに思ふ、秀頼殿も亦一入重成に同情を寄せられて、其れより一層重成を愛しまるゝ左れば山瀬は一層重成を憎みて、何にか落度を見出し、其の寵を薄らげやうとのみ考へてゐたが、精忠無二の重成が爲すこと云ふこと、一つとして左や右云ふべきことのあらざれば、山瀬は唯だモリ羨み嫉むのみであつた。

左右する中に其の年も暮れて、慶長十五年とは爲つた、世は益々太平のやふなれど、何處やらに曇れる雲のあるらしく、決して油断はならずと、睨をつけたば大阪の重鎮たる、片桐且元、さては七隊長等の面々である、なれども淀殿は、幾時までも我れば安泰なりと思ふてや、仕たいまゝの亂行に、云ふも思はしきことながら、閨門が亂れてゐる秀頼殿は何を云ふても未だ年が若い其上秀頼は秀吉が、五十七歳の時の子であつた、其れで育て方が何うしても甘かつたところへ、持つて来て、其の性質が武人的でなく、所謂蒲柳の質と云ふ方で優しく、宛然女の如き風であつた、加之ならず母の云ふ事には、反かぬと云ふ孝心深き方にてあつたから、淀君の云ふことは是非、ともに聞き入れられる、左れば従がつて淀君は、したいまゝのことをする、其れで大阪城内には、閨門の亂れ、奸人佞者が淀君を取り圍むと云ふ、誠に早や慨かはし、痛ましい、觀を呈してゐたのであつた。

此に反して徳川家康どのは、關が原の勝戦以來、其の勢を破竹のごとく、殆んど天下の大權を双手に握り、朝廷よりは征夷大將軍に任ぜられて、江戸に幕府を開き、天下の諸候も亦た徳川氏に従ふと云ふ有様であつた。榮枯盛衰一喜一憂は、天下の常と雖ども、豊臣氏の勢おは殆ど地に落ちたかの觀あるに反して、徳川氏の勢力は、旭日昇天の有様である。其れで豊臣方の忠臣賢士等は、早くも今に徳川方と、必ず争が生ずるに相違ないと思むだ、其れだに依つて其の時の用意を、十分にして置かればならずと考へ、其れかあらぬか豪傑剛勇の人士を、多く召し抱へることに、心を碎いてゐたなれども淀君は忠臣賢士が、豊臣家の爲め、秀頼の爲めに、斯の如く心を碎き居ることを知つてか、將た知らいでか、佞人原の甘言に心を娛ばしめて、太平の夢に、痴のあるだけを盡し居るこそ、さても憂てし。右京の局の部屋にては、二三日前より、降りつゞく糸のごとき細く長さ五月

雨の、未だ歇みやらぬ鬱陶敷さと、徒然さに、水入らずの親子二人、誰に遠慮ら對座い、重成が貼て出す薄茶を、母の局は嬉し氣に喫みつゝ、四方山の話をしてゐるところへ、局が召使の小萩と云ふが入り來たつて。

「お局さま、豊後守頼包さまの御内方がな五月雨のお見舞にと云ふて、お越しあそばされて、御座りまするかと云ふ。

「オ、左様か……其れは其れはと、局は一才と思案をしたが、ウムと點きつゝ、其れでは此處へお通し申して呉りやれと云ふ、間もなく豊後守眞野頼包の内方は、靜々と手土産を携つて入つて來る。

「此れは眞野様には、能ふこそその御入來、五月雨とは申しながら、降り續きます此の雨、お鬱陶敷さのほど、お察し申し上げますと、右京の局は町寧に挨拶をする。

「御同様に鬱陶敷さ……併し御許様には、日々の御勤め、御大儀千萬に存じ

られますると、頼包の内方も又た町寧に挨拶をする。

侍女の小萩は、お菓子を出す、お茶を侷める、折から樂衣を假の禮服に改めたる重成が、此れへ出て來て下座に坐り。

「此れは眞野様の奥方には、能ふこそその御越し、五月雨の折柄とは申うせ、日々の小雨に、格別のお變りもあらせられず、お健かなる體を拜し大慶至極の至りに存じますると、最も町寧に挨拶を述べる。

内方はツク／＼と重成の風采を眺め、ア、美しい殿子、天下の美少年とは、斯る御方の事をや云ふなるべしと、云はんばかりの風情にて。

「オ、此れは長門どので御座りまするか、暫りくお目に掛りませぬ中に、又た一入の御成人、加之ならす見違はばかりに美しくならせられ、妾も悦ばしゆふ存せられますと云ふて、ニコ／＼と笑ひながら、右京の局に向ひて、確か十八に爲られましたなと云ふ。

「ハイ……身體ばかり大きゆふ爲りまして、萬事に行き届きませす、世話のや
けまする儀に御座りますると云ふ。」

「ほんにマア惚々するほど、美しくゆふ御立派にならせられ、お局どの、お
悦び、如何ばかりかとお羨ましゆふ存ぜられまする、オホ、……其れ
に就ても右京どの、思ひ出されまするは、去年の秋の淀の御前様がお戯れ、
又たその節の山瀬が嫉妬、さて人の身には様々なことが御座りまするな。」

「本常に左様で御座りまするわいなと。此に三人は鼎の足の如くに坐を占め
て、互ひに顔と顔とを見合せ、無言のまゝにて、深き感慨に沈んでゐたのであ
つたが、稍あつて眞野の内方は、何にやらむ靜かに點きて。」

「右京どの、妾が今日伺ひましたは、五月雨のお見舞かたがた、夫頼包
の云ひ附も御座りまして、お身様と、長門どのとに、泌々と御相談申し上げた
き儀の御座りまするので、其れをかれて實は伺ひましたる次第に御座ります」

る、就きましては少しく込み入りまして、今日御前の
御用おはしまするやうなれば、今日に限られましたることにても御座りませれ
ば、と右京の都合を聞かんとするのである。

事の次第は素より知らふ筈なけれど、容子あり氣な言の葉に、右京は今日は樂
日にて、親子とも終日、休息いたし居りますれば、御緩と打ち寛ぎられます
るやう、願はしゆ存じまする。

「オ、左様で御座りまするか、其れは何により重疊、然らば兎も角も其の次第
申し上げまするほどに、お聞きあそばされて下さりませと、眞野の内方は嬉し
氣に軽く點きて、打ち寛ぐのである。」

「實は長門どのに、不束ながら娘の尾花を、貰ふて戴きたいと斯様に存ぜ
られまするで、御座りまするがと、突然なる内方の話し。
如何なる事の御相談かと思ふてゐたら、意外にも縁談のことなるより、右京は

ニツコと優しゆふ笑む、重成は無言で頭を垂れてゐる。
 『突然のことにて、嗚ぞ迷惑なと思召さるゝかは存せれど、娘も今年は十六、幾時までも彼のまゝで置きます譯にもゆかず、と云つて望まるゝ方は、数々御座れど、頼包にも妾にも氣に入りませず、又た尾花も御家中にて、未永く身體をお委せ申す御方は、長門様より外にはないと、斯様に申し居ります、其れゆへあつかましく御座りますれど、此の縁談御承知下さりまするやう、願はしゆ存じまする。』

『長門ごとき愚な者を、其れほどまでに思召されて、御容色と云ひ學問と云ひ、御貞淑の聲え諸將方の間に隠れなき、尾花様を、嫁御察にとは、冥加に餘る有難儀に御座りますれども、併し此の事はかりは、我々親子の一了簡にては、左右の御挨拶をもいたされませればと云ふを、皆まで聞かず、眞野の奥方はホ、笑みつゝ。』

『上様のお許の儀で御座りませうがな……其の事なれば、右京どの御安心あそばされて下さりませ。』

『何んと仰せられますると、右京は優しゆふ奥方の顔を見上げる。』

何によりも彼よりも、大切なるは上様の思召で御座りまする、其れで實は一月ほど前に、頼包が此の事を片桐さまにまで申し上げて、御相談いたされて御座りました、其の節片桐さまの仰せられますには、誠にふさわしき御縁じや、此の御縁談にして、纏まらば尾花どの御幸福は云はずもがな、長門どの御幸福も、又な一入で御座るとあつて、其れから且元さまが、上様に申し上げられましたところ、上様に於せられても、其れは誠に良きことじや予も嬉しゆふ思ふに依り、然るべく取り計らふて遣はせとの、有がたき御誼であつたと、五六日前に且元様より、わざぐのお知らせが御座りました、其れで今日肝心のお身の思召し、又た長門どの御心中、其れや此れやを、先

つお聞かざ願はしゆふと存じて、五月雨のお見舞をかこづけに、お伺ひ申した
ので御座りますると云ふ。

「其れは其れは、左様なれば上様より、片桐様にまで、此の縁談經まらば
許すほどにとの御内証が御座りましたのでと、云ひつゝ右京は喜んで、

「上様の思召と云ひ、片桐様の思召までが、右様の次第に御座りますれ
ば、妾は願ふてもなき大幸福、此の様な悦ばしいことは、お身様御座り

ませぬわいな、が併し、肝心の重成、素より願ふところで御座りませうとは、
存じられますれども、一應は心の中訊れてみれば爲りませぬほどにと云へば

奥方も、云はん方なき嬉しさの色に満面の笑を包みつゝ、如何にも御尤もな
る次第で御座りますると點く。

「重成……其方は何んと思やる、改ためて申さいでも、先刻より聞きやつた通
りの有がたき、奥方のお言葉、餘もや異存はありますまぬのう。

問はれて重成は、垂れてゐた頭を靜かに擡げる、母なる局と、奥方とは云
ひ合したやうに、ニツコリと其の顔を眺める。

顔を優しゆふ眺められて、重成は、んな話には、未だ慣ざる處女氣の、流石
にうら蓋かしゆふてやありけむ、白玉のごとき顔に、パツと薄紅を刷

せつゝ、其れへ靜かに兩手を突きさす。

「才色比類なき尾花どのを、拙者奴に添させんと、辱なきお志、長門
何んと御禮申し上げて宜しきやら、身に餘る光榮と、嬉しゆふ御禮申し上

げまする、母上様よりも宜しゆふ、御挨拶をと云ふに、んソ〜奥方は、
「其んなら長門どのにも、御承知下さりましたして御座りまするな。

ハイ……と重成は言葉を濁りらせて、再び兩手を突きさす。
「願ふてもなき、身に餘る光榮に御座りますれども、只今のところでは、此の
縁談、失禮ながら御承引いたしかれまする。

「何んと云やると、母なる局は案に相違の不審顔、奥方も亦た不審顔にて、其れではお嫌じやと、云はれまするので御座りまするか。」

「イヤ嫌じやなぞと……では更々御座りませぬ、此の縁談重成の希望いたすところでは御座りますれど、只今のところでは、御遠慮申し上げればなりませぬと、キツパリ云ふ、二人は愈々呆れ顔なり。」

「上様のお許もあり、又た父とも仰ぐ片桐様の、膽入も御座るに、遠慮せれば爲らぬとは、抑も誰にさても合點のゆかぬこと、兎も角も其の仔細聞かしやと、母なる局は我が子の顔を見守る。」

「其は別事にても御座りませれど、昨年の秋、住之江にて、淀の御前様より、お盃を下されましたる砌り、其のお盃お請けいたさぬは、作法を守りてと云はるゝが、其の實は尾花どのへ對しての、心中立と、在もせぬ作り語を、山瀬が御前へ申し立てまして御座りました、然るに未だ一年と経ちませぬ折か

ら、改ためて尾花どのと、盃事いたせば、さては矢張り山瀬の云ひし通り尾花と長門とは、互ひに心を寄せ合ふてゐた、戀中でありしか、年はゆかれど、さても猥など、尾に尾を生して取沙汰さるゝが口惜しさ、其れ故に此の縁談は……母上お察し下さりませ……

二人は聞き終つて互ひに無言、顔と顔とを見合せつゝ、太き吐息をつくのみに、折から先の程より降り續ひてゐた雨は、益々劇しゆ爲つて来て、風さへ加り、宛然夕方のごとき觀を呈して、遠くに聞えてゐた雷聲鳴は、近ふ爲つて来て、何んとなく物凄し……

○重成後藤又兵衛を尋ぬる

秀頼どの、御前にて、半刻ほどに餘る密議を凝して、今桐の間の武將溜へ、靜かに戻つて来たは片桐且元なり。

此の時に武將溜にぬたのは、眞野頼包に、伊東長次而して堀田正高の三人であつた、此の三人は、皆な七隊長の方々である。

「且元どの、只今お下りで御座りましたか、御前の御協議、如何に纏まりました其の儀承はりたくと存じ、我々三人、お下りをお待ち申して居りまして御座りましたと、眞野頼包は先づ云ふ。

「オ、左様で御座りましたか、其れは御大儀千萬……と云つて、且元は更に居住居を直して、言葉を変ため。

「昨日眞田どの御列席の上にて、方々と御協議いたせし通り、木村重成を差し遣はすことに決定いたし、上様の御許可を得て御座りました。

「オ、左様で御座りましたか、其れは重疊、我々一同も満足の儀に存じ申すと、堀田正高と伊東長次の兩人は口を揃えて云ふ。

折から殿中の茶坊主は、片桐且元の下りしを知つて、恭しく茶を運ぶ、而

して引き下らんとするを、坊主待ちやと且元は引き止めて。

「木村殿の許へ参り、重成どのに此れへ來ませと申せ、シテ其の足にて、眞田どの打ち寛るぎで御座つたら、御足勞ながら且元、御意得たしと甲し居つたと傳へひ、心得て御座りますると坊主は下る。

問もなく重成は禮服に威儀を正して、此處へ來る、長門どのブーツと進まれひ篤と其方に申し聞けることあればと、且元の言葉……ハツ……と重成は一禮して、静かに疊二疊敷ほど前へ出る。

「其方の忠魂義膽を、見抜き、時より浮世話として物語りいたし居つたこと其方能ふ悟つて、あらふな……ウム……就いては、其方も話に聞いて知つて、あらふが、黒田長政の旗下に、剛の者ありと諸侯方の中にて、其の名を知らざる者なき、後藤又兵衛基次と云ふ豪傑がな、先年長政を棄て浪人いたし居るデ、其の豪傑を秀頼どの、御家來に、召し抱へたら、萬一の場合、如何ば

かり我々の力と相成るやも知れずと、先頃より又兵衛基次の在所を、其れとなふ捜させ居つたる折から、奈良の近處にて二三度怖たるしき彼の姿を、見掛けた者あるとのことを、此のほど確と承知いたしました、其れで奈良の近處を細さに捜したら、必ず基次を捜し出せるに相違なきゆゑ、其の役務を其方に申し付く。

と先づ概略の容子を物語られた、ところへ大阪城の軍師として、智勇兼備の名將として、其名後世に匿れなき、眞田幸村は入つて来た。

斯と見るより、幸村どの早速の御出仕、満足に存じ申す、上様には長門を差し遣はすこと、至極宜しかるべしとあつて、殊の外なるお悦びで御座りましたに依り、只今その容子を、概略長門どのに申し聞かせて居りまする所に御座りまする。

「左様で御座つたか、其れは何にかと段々のお骨折り、殊に上様にも、お悦

びと承はつては、幸村斯様な満足は御座り申さぬと云ふ。

「眞田様、只今片桐様より概略の仰せ承はり、身に餘る大役を仰せ付け給はりましたる段、辱なふ存じまする、なれど此の大役、拙者の如き若輩者に勤まりませうや否や、其れのみが心掛りに御座りまする。

「ウム……勤まり申す、お身ならでは此の大役、他に勤まる者はあるまじと、且元殿も仰せられる、又た拙者も而く存する、加之ならず此に御座る、七隊長の御方々も、長門どのこそ此の大役然るべしと仰せられる、其れで上様へ申し出でたるところ、上様に於せられても、只今且元殿の仰せられたる通り、長門ならば、必らず基次を呼んで来て呉れるであらふから、悦ばしいとの御意、かたぐ其方に委すほどに、上様の御爲め、豊臣家の御爲めに、一層忠節を盡して呉りやれよと云はれる。

「恐れ入りましたる幸村様の御誼、重成心血のあらむ限り、忠節を勵みと

う存じますると、喜色溢るゝ重成の顔を、一同は信度眺めて、亦た殊の外なる満足の體であつたが、幸村は聽て何にやらむ靜かに打ち點きて。

『さて長門どの、後藤又兵衛基次と云ふ方はな、年配確かに四十五六、筋骨たくましく力量人に勝れ、身の丈六尺からある、天晴の大丈夫で御座るぞ。黒田長政、後藤又兵衛を片腕として、大切にいたし居つたが、其の武勇其の剛膽、己より上に出るより、如何なる思召にてか、又兵衛を、けむたく思はれたので、己を知らざる者に仕ふるは、大丈夫の本懐にあらずと、終に黒田家を立ち去つた、其の砌り、細川家にて直に召し抱へやうとされた、なれども同じ九州の土地に於て、而も舊主と隣れる細川家に、抱へられるは面白からずと、其のまま、飄然と何處へか立ち去つた、左れば義にも強う堅き人物、誠に豪傑中の豪傑にて、容易に得がたき勇將じゃ、乃で此の勇將を召すには、縁高の如何、待遇の厚薄などにては、決して動かすことの出来ぬ丈夫じゃ

此のところを長門どの、能ふ會得されてな……宜しいか、だに依つて此の大役は、お身ならでは勤まるまじと、評議を一決いたしましたので御座る、然らば如何いたせば、此の豪傑を、豊臣家へ引き入れることが出来るかと、お身は思はるゝであらふ……因てお身の参考までに、拙者の存じ寄を申そふ、又兵衛を引き寄せるには、忠義と堪忍との二つでなければ出来ぬ、お身の忠魂も又た萬人に秀でたる勘忍強きことよば、片桐殿を始め、一同の方々も、十分に認め居られ申す、其れでお身に、この大役をお委せ申すことにいたしましたので御座ればこの儀篤と得心されて、お抜かりなきやう、お頼み申すぞと、幸村は其れとなふ又兵衛を引き寄すべき手段を教えた、すると此度は片桐且元が。

『幸村殿が、只今細々と仰せられたること、能ふ御得心なゆかれたであらうな、又兵衛どのを引き寄せることは、お身の忠節と堪忍とより、外には手段と云ふては御座らぬ、宜しいか、其れから又た故意、又兵衛どのを引き寄せると

云ふやうな容子が、毛ほども先方に見へては、如何なることあるも、又兵衛どのに動かれませぬぞよ、左るに依つてお身は、只だ一人、御領地内の御容子を見ぬ参らすると云ふ風にて、お出向き下され、シテ傍ら萬一豊臣家に、事ありたる節に用立るやう、篤と地の利を調べられよ、且つ又た後藤どのが、確かに奈良に居るやら、堺に居るやら、其儀確かでないが併し、大阪の近邊に居るには相違ない、この儀も又たお身の心得までに申し添へまするぞやと云ふ、重成は逐一聞き終りて。

『御兩所様の細々なるお心添へ、辱なふ存じまする、不肖重成、後藤どのをお伴れ申されば、再び大阪城の御門は潜り申しませぬ。』

『ウム、先づ其の御決心にて、忠節をお勵み下されひよと、且元と幸村とは口を揃えて云ふ、重成謹んでお請をいたし、其れより出立の用意に十日ほどを費し、慶長十六年の霜月中旬に、本村長門守重成は、後藤又兵衛基次

の在處を捜すべく爲めに、大阪城を立ち退いた。

○重成の堪忍袋

歲月は實にや流水のごとく、瞬間時に二年を過して、世は慶長十八年の春とはなつた、世間は百花爛漫の樂しさに、人は喜び狂じてゐる、けれども大阪城内は、何にやらむ暗雲がたなびいてゐる、片桐真田等の忠臣を始め、七隊長の方々、さては木村長門、薄田隼人兼相、渡邊内藏介などの面々は、豊臣家の爲めに、何にやらむ太く心を痛め居る容子、此れに反して大奥は、淀どのを始め、お傍に侍べつてゐる佞人奸士などは、何事も知らざるかの如き觀にして、春の陽氣に酔ふてゐる。

御前様、竹齋が参りまして御座りますると云ふたは、長曾我部盛親の室の、例の、すれくれ者の山瀬が侍女である、而して御前様と呼ばれたは、山瀬のこと

なり。

此れへ通しやと、山瀬の言葉に、其の竹齋と呼ぶ、殿中にて小才の利く茶坊主は、其處へ坊主頭を振りたてゝ入つて来た。

「其方の來やるを待つてぬだぞへ、サ、遠慮はめらぬ近ふ寄りやと、云はれて竹齋ノコくと、山瀬の傍へ進み寄り。

「御前様、坊主奴に何にやら御用おありあそばす由、昨日お使を戴き、早速お箱へ伺候いたすべきで御座りましたが、昨日は勤番のことよて心ならずも、得伺はれませず、悪からずお許しのほどを。

「折り入つて其方に、頼みたい事があるじや、成就させて呉りやるなら、褒美は其方の望み次第に遣はそふわい。

「へー……其は又た改まりましたる御前様のお言葉、日頃より一方ならぬ御虫負に、預かつて居りまする私、如何様なる難事にてし、更々厭ひはいた

しませぬほどに、仰せ付けられて下さりませと云ふ。

「オ、其の言葉聞いて満足に存するぞ、實は斯々斯様なことをと山瀬は竹齋を傍へ引き寄せ、耳に口を當て、秘々と何にやらむ秘語く。

「左様なれば長門殿の頭をば……シツ、聲が高い、妾の箱とは云へ、他人が幾許もぬる……心得やつたか竹齋と、山瀬はニツコと笑む。

「御前様への御恩報じ、二三日中に信度、お見舞申して見ませう、御安心あそばしませ御前さま、アハ、……と、何事なるかは知られど、竹齋は容易く引き受けた。

今日は三月十五日、禮日とて家臣の面々は、皆な秀頼殿の御機嫌を伺ひに登城する、長門守重成は、今しも御機嫌を伺ふて、静々と竹齋を始め四人の坊主が控えてゐて、長門守さまお下りで御座りまするか、町寧に挨拶を述べるを聞き下り行きつ、重成軽く打ち點ひて、何氣なく片脇を見る

と、斯は如何に、竹齋坊主胡座をかいてゐる。
 重成は天下一品の美少年である、其の心の優しきことも、亦た可愛らしき處女のごとくである、なれど魂膽の堅固なることは、鐵石も音ならぬ位である左れば今竹齋が、胡座をかいてゐるのを見て、其のまゝ知らぬ顔で、濟す譯にはゆかぬ、と云ふのは殿中の作法に反いてゐるからである。
 竹齋これへ出ると、女のやふなる聲にて、やさしゆふ云ふ、すると竹齋待つたと云はむ許りの顔附にて、ノコノコと其れへ出る。

『其方、殿中の作法存じ居るであらふな……ウム、然らば何故あつて、胡座をかき居るか、身許は其方が胡座を、かき居らふと臥そべり居らふとも、聊か咎めはいたさぬ、なれど殿中の作法を守らぬは、御奉公いたし居る身の、上様に對し奉つて失禮であらふぞ、お後よりは片桐様、續ひて眞田様もお下りじや、氣をつけいと諒すやうに、柔順ゆふ云ひ聞かせて、其のまゝ行き過ぎん

と、長上下の裙を捌きたる途端に、其の端が竹齋の顔に觸つたのであつた、此れは竹齋が、故意に其の端を觸わらせやうと、殊更に重成の傍へ寄り添ふて坐つてゐたからであつた。

重成は其様ことに頼んと氣もつかず、二足三足歩み出した時に、長門様と、竹齋が呼び止めたので、何んじやと立ち止まる。

『長門様には何に御遺恨の御座りまして、竹齋奴の頭へ、土足をおかけなされましたか、竹齋奴は假令踏みにぢられませうとも、聊か厭はいたしませれど、只今は拙者奴、御殿中に置きまして、お勤の身、左れば御同様に上様の、御用を承はり居りますもの、然るに土足にかけらるゝとは、此れ上様を辱しめられたる道理と、思ひがけなき難題を云ふ。』

『身許が何時、其方を土足にかけたか……わつけもないことをと、重成は涼しき眠に露を淨ばせて、シロリつと竹齋の顔を見下す。』

「イヤ云はしませぬぞえ、長門様、只今其の御足ヲ揚げ、袴のお裾にて私の横顔を、叩かれたでは御座りませぬかと云ふ。」
 「今捌きたる袴の裾が、其方の顔に觸りしかな、其れは身許の知つたことではない、其方が袴の裾の觸る處に居つたからじやわい、ハテさて悪にもつかぬ痴言を、アハ、ハ、ハ……と其のまゝ、行き過ぎんとする重成の後より、無法無禮、竹齋は右手にしてゐた扇子にて、丁々と二つまで重成の烏帽子を叩ひた。」

「何に坊主無禮なツ……と云ひつゝ、重成顔色を變たが、俄かに何にやらむ悟りしことのおつてか、オホ……オホ……さしては竹齋、仇討をしやつたのう、アハ、ハ、ハ……と其のまゝ下げてしまつた。」

此れは竹齋が、全く山瀬に云ひつかつて、重成を辱しめたのである、此の時重成が怒つて、刀を抜いて、一討にいたしたら、殿中にて刀を抜いたと

云ふを盾に取つて、大阪城より投げ出したさしめむ、又た其のまゝにて濟ませたら、重成は坊主ごときに頭を叩かれ、能ふ咎めもせぬは、臆病武士なり、腰拔なり、斯る者に扶持與へ置きたればとて、まさかの時に何の役にか立つべきと、悪さまに云ふて失策せむとの兩股かけたる山瀬が奸智であつたのである、山瀬が重成を妬むことは、斯く幾時までも執念ひ、此れは重成が去年後藤又兵衛基次の在處を確め、而して大阪へ来て、秀頼殿に力を盡して呉れ頼みたる、其の赤心に感じて、又兵衛が去年の暮より、秀頼の家臣と爲り、君の馬前に於て、一身を棄ると誓つた、此の功に依つて重成は益々重く用ひられ、而して長門の名は愈々諸將の間に持てはやされる、斯る折から秀頼ど

のには、重成も最早や本年は二十……幾時までも、獨身にては段々と、年嵩が行く、右京も、心淋しけからふほどに、早く嫁を迎ふるが可いと云はれて、尾花を勧められる、尾花は重成の外には、夫を持ぬと、三年前より其の時節

の來たるを、待ち焦れてゐた、重成も亦た妻として生涯の苦樂を借にするは、尾花より外にないと、同じく尾花を慕ふてゐた、其れや此れやで長門の身には名譽と歡樂とが集まつて來てゐる、此に反して鳩之助は日蔭に萎む雜草のごとき、有様である、此れは素より蒔きし種の報めで、理の當然である、なれども心の曲りし、山頼は一入に重成を妬み憎み、何うかして失策せやうと、さてこそ斯る無法極まる奸智を廻らせたのである。

竹齋が二度まで、重成の頭かしらに手を加えたるにも拘はらず、重成は、たしなめもせず怒りもせず、又た懲しもせずして、其のまゝに濟せし事が、其の日の中に殿中の評判となつて、重成の心底を十分に知らざる者は、腰拔武士よ意地なしよと嘲けるのであつた。

今しも眞野豊後守頼包は、淀どのにお召に依つて、奥御殿へ出仕し、思案の小首を傾むけながら、竹の間の溜たまりまで下つて來て、而して一人何やら考

へに洗んでゐるところへ、長門守は秀頼どのの御前より下つて來た。

『オ、豊後守様で御座りまするか、重成は言葉を掛けて會釋した。』

『長門どの、今お下りでか……ウム……能き所でお目にかゝつた、豊後お身に少しくお訊れ申したきことが御座るじや、先づ近ふ寄られひ……實は十五日の禮日に、お身が竹齋の爲めに、此の上もなき恥辱を受けられたに、一言のたしなめ懲もいたされず、其のまゝに濟せられたは、臆病なり腰拔なりと、大奥までの御噂さ、身許はお身の心底、大方其れと推察はいだし居れど、さて御承知ならぬは淀の前、只今拙者を特に召されて、重成は存外の臆病もの、右様な心にて、御奉行出來るか、豊臣家に萬一のことありし時に、何んの役にか立つ、兎も角も重成の心底聞きて、返事せいと斯様に仰せられたがと、云ふを聞いて重成は。

『豊後様、淀の御前のその御立腹、至極御尤もに御座りまする、如何にも武士

の法としては、彼の場にて竹齋を打ち果すべきで御座りまする、實は彼の時に無禮極まる坊主と、右手は欄にかゝりかけまして御座つたが、イヤ……怒るべきではない、殿中にて抜き討ちにいたせば、御家の御諺として拙者は、永のお暇 戴くか、乃至切腹仰せつけらるゝ儀に御座りまする、重成の生命……重成の一身は、上様に差し上げて御座りますれば、私のまゝには爲りませぬ況して取るに足らざる虫けら同然の者と、争ふは却つて武士の恥辱と、斯様に存じましたに依り、其のまゝにて濟ませて御座りますると、此の言葉に豊後守、今更ならぬ感服して、思はずハラ／＼と落涙なしつゝ、早速その由を淀どのに申し上げたから、淀君も成ほど會得された、此れにて山瀬が反問苦肉の計略は、水泡に歸して、長門の名聲は益々高まつたのである。

ところが此の話聞いて、承知せぬのは後藤又兵衛基次である、基次は重成を我が弟のやうに思ひて、可愛がつてゐるのみか、淀君の閨門亂れ居るこ

とをも承知し居る、又だ長曾我部盛親が室の山瀬が、重成の名聲を羨み妬み居ることをも、話に聞いて十分に承知してゐる、乃で剛氣の又兵衛は、竹齋の無禮を太く怒り、折あらば他日斯様な不埒を、再びいたさぬように、懲し置き呉れむと思ふてゐると、或る日のこと、梅の間の溜にて、又兵衛が徒然の餘り、薄田隼人兼相を相手にして、碁を圍んでゐるところへ、竹齋が茶を持つて入つて来て、よせばよかつたに、何氣なく碁の批評を、知つた顔にしたすると又兵衛は烈火の如くに怒つて、武士を武士と思はぬ不埒な坊主奴、その性根ゆへに此のほども、長門どのに言語道斷の恥辱を加へよつたのじゃ、今日は長門どのでない、又兵衛基次じやから、容赦はいたさぬぞ……ズ、ツと出ぬ竹齋と、基次は破れ鐘のやうな聲を振り上げて、怒鳴つけたから、竹齋慄へ上つて、御容赦下さりませ、後藤さま、お許し下さりませ基次さまと、云ひつゝ逃げ出さんとするを、薄田隼人兼相が、躍りかゝつて其處へ捻ぢ伏せた

何んしろ十人力と云ふ大力無双の単人に、捻じ伏せられたのだから堪らない、アイタ……タ、……単人様、呼吸の音が止まりまする、腕が折れますると、竹齋は泣き出した。

又兵衛は竹齋の傍へ進み寄つて、二つ三つ大きな拳骨を頭へ食はせつゝ、生命が惜くば長門どのに、此のほど恥辱を加へた其の次第を申せと詰られる。

竹齋は大變なことに爲つたと、思ふたが、併し事の次第を明白に云はれば、大方の単人どのと、剛男の基次どのの事だに依て、擲き殺されむも知れず、生命には替られないと思つて、山瀬に頼まれたる、一部始終の奸策を、残らず自狀に及んだ、兩勇は今更の如く、顔を見合せて呆れたが、事の次第が分つたので竹齋は兎も角も擲き殺されることだけは逃れたのであつた。

其れより十日ほどを経てから、山瀬は大奥への出仕相成らずと、又たもや閉門を云ひ渡された、而して引き續きに、長曾我部盛親に、鳩之助を探し出せと

云ふ殿命が下つた、此れは山瀬が鳩之助を圍居ることを、城内に於て承知されてゐるからである、斯して鳩之助は、叡山にて犯せる罪と、伏見の一件とを改ためて取り調べられて、終に切腹を仰せ付けられた、其れから竹齋は生命だけは許され、着のみ着のまゝにて、お拂ひ箱と爲りて、此にこの紛擾は一段落を告げたのであつた。

左右する中に、夏も過ぎ秋も暮れて、十月小春の初め頃、重成は秀頼の勸めもあり、片桐真田等の云ひ聞しもあつて、此に後藤又兵衛基次の媒酌にて尾花と芽出度結婚の式を擧げた、婿どのば天下第一品の美少年……嫁御寮は美人中の美人と云ふのであるから、其の夫婦中の濃やかなること、琴瑟もたゞならぬのであつた。

○今福堤の大功名

慶長十九年の四月に、京都は方廣寺の普請が出来上つたので、秀頼どのの鐘を鑄て納めたところが、其の鐘の銘に、國家安康と云ふ四字を刻つた、此れが端なく徳川家康どのの機嫌を損じ、國家の家の字と、安康の康の字を連ぬれば家康と爲る、此れ取りも直さず、鐘に事よせて、我を誣ふのであると、家康どのの非常な立腹であつた、精忠無二の片桐且元は、非常に驚ひて、當時家康どのの居城たりし、駿府の城に赴きて、百方と云ひ開きをしたけれども、家康どのの機嫌は直らない、此の時に淀君の一方ならぬ寵遇を蒙つてつた、奸物の大野治長と、淀どのの季父にあたる、織田長益の兩人が、徳川殿餘りに秀頼殿をお侮りなさる、此の分にては、今に如何やうなことを、仰せ出さるゝやも知れぬ、如す一旗擧げて、豊臣家の威光を示めさんにはと、淀君を煽てた、何にがさて二人の云ふことは、如何なる事にも聞き入れられる、デ、オ、其れ可からうと、淀どのの言葉なれど、片桐且元、真田幸村、後藤又兵

衛などの面々は、承知しないが淀どのの、秀頼を勧めて軍をせいと云はれる孝心厚き秀頼拒む譯にもゆかぬので、軍の仕度せいと云ふ、片桐真田等は素より、右京の局も大藏の局も、懇々と其の宜しからざることを、淀君に申し上げ、涙を流して意見に及んだが、淀君は、頑として用ひられないテ仕方がないから、其の年の五月雨の頃より、大阪にては戦争の仕度に取りかゝつた、斯と風の便に聞き傳へて、諸國に逍遙てゐた、浪人達はさても面白し、一働させむものと、我も我もと大阪みかけて駈けつける、されば大阪の騒動は、俄かに鼎の湯の沸き立るが如き觀を呈してゐる。此の事が早くも駿府へ聞へたから、其は以ての外なる心得違なりと、家康どののは早速使者を立て、諭す、而して天下に事を起すは、好ましきことなられば是れまで通り仲よくいたそふではないかと、所謂和睦の相談を持ち込まれたなれども大野治長に織田長盛は、御承知なき方がよろしいと、抑も如何なる成

算のあつてか、徳川方の此の使者に對して、勿れつけらるゝがよろしいと、淀君を飽までも煽つた、其れで淀君は承知せなんだから、左てこそ徳川氏は是非に及ばすと云つて、江戸よりは二代將軍秀忠どのが大軍を率ゐて出發される、又た駿府よりは老年の家康どのが、自ら秀忠どのが後見と云ふやうな工合にて、出陣される、斯の如くにして此に、所謂大阪冬陣の戦端を開かれたのであつた、是れ實に天正十九年十一月なり。

此の役に木村長門守重成は、二十二歳の初陣である、なれども其の智勇は忠魂と相和して、威氣當るべくもあらず、千餘の兵を率ゐて、鷓野今福の柵を守つてゐたところが、鷓野の柵は、徳川方の大將上杉景勝の爲めに破られ、續ひて今福の柵も、佐竹義宣の爲に破られた。

此のとき木村重成は、此の急を聞きて只だ一人、馬に鞭を加へて、佐竹義宣の勢ぬに乗じて、攻め寄するを防がんと、躍り出たる其の勢ぬの健氣さを、城の

望樓に在つて、早くも眼に止められたる秀頼どのは、重成の身上を氣遣はれて片脇に控えてゐた、後藤又兵衛基次に、お身行きて重成を援け呉りやれと云はれる、心得て候なりと、馬を躍らせて馳せ向ひつゝ、

『重成どの、最初よりの戦ひに、定めてお疲れで御座らふ、左れば拙者お代り申そふほどに、城内へ戻られて、先づ暫らく御休息あれと、大首聲に呼はる、重成は馬上にて莞爾と打ち笑ひつゝ、』

『基次どのには、何んと仰せられまするにや、御覽の如く戦は、只今が大事の最中に御座りまする、然るに此の時、突然大將の事をお身にお頼みいたしましては、陣立が自然と亂れ申す恐れあり、此の事は憚りながら、拙者ことき弱輩者が申さすとも、戦場には御老功のあらせらるゝお身……先づ兎も角も、此の戦は勝敗の決しまするまで、拙者にお任せ下さりませとの言葉に。』

『オ、天晴なり、長門どの、基次恐れ入つて御座ると感心なしつゝ、又兵衛

は其のまゝ後へ下つて、横合より佐竹義宣の陣を撃つた、此れが爲めに義宣の陣は稍や亂れかゝつた、此に重成勢を得て、奮闘しつゝ、散々に佐竹の軍を撃ち破つて、終に義宣が脇腹と頼める、老将澁江政光と一騎打をして、美事突き斃しつ、其の首を擧げたので、義宣の陣は散々の敗をしたのであつた。なれども、徳川勢は五十萬と云ふ大軍、加之ならず諸大名は、皆な力を徳川氏に致す、之に反して大阪方は、諸大名の力を盡すもの、殆んどなると云ふても可い位であるから、終に城外の柵は、残らず徳川方に攻め落された、なれども大阪城は流石に、攻め落すことは出来ぬ。淀どの今更のごとく後悔された、けれども六日の菖蒲十日の菊にて、モリ追つ附ない折から十二月の初旬に及んで、徳川方より、和睦の相談を持ち込まれた、弱り切つてた淀君は、和睦と聞いて太く打ち喜び、外濠を埋め立つることとを、和睦の條件として、此に戦争は終り、其れより和睦の誓書に、家康どの

が血判を捺させられることゝ爲つて、其の血判頂戴の使者を、城中より家康どのゝ本陣へ、差し向けることゝなつた。乃で此の使者には、誰を差し向たら可からふかと云ふ大評議を開きたるが、何れも皆な木村長門こそ然るべしと云ふ意見にて、此に家康どのゝ血判頂戴の大役を、木村長門守重成が承はることゝ爲つたのである。

○茶臼山の血判頂戴

十二月廿四日の午前を期して、和睦に關する條約書を取り替すことに確定した、此の時に家康どののは、天王寺の畔、茶臼山に本陣を置かれ、而して徳川方よりは、秀頼どのゝ血判頂戴の使者として、板倉内膳の正勝重と、阿部備中守とが、大阪城へ来る、豊臣方よりは、木村長門守重成が、郡主馬を添役とし、足輕二百人を供に連れて、茶臼山の本陣へ出掛ける。

重成が大阪城を出る前に、片桐月元や真田幸村等は、大御所（家康）も最早や七十の阪を越された、老年である、左れば今までと違ふて、家來の申すことを能くお用ひに爲る、其れ故に血判には篤に目を止めて、悔を後に遺すことのないやう、御如才はあるまじけれど、心を配らるゝやういたされよと、特別の注意がある。

御安心あそばされませ、重成決して上様の面目に、關するやうなることは、天下に誓つて仕つりませればと云ふて、晴の場處の晴の役目のことなれば、心を籠めたる禮服に、身の邊を飾つた、左れば玉に化粧を施せしかの如く、天下一品の美男子は、一層の風采を添えて、其の美しさ立派さ、無情の草木も此れを見たらむには、徐に何にやらむ云ひ出でむかと、思はるゝ許なり。

聽て重成は、天王寺口より茶白山なる、家康どのの本陣の表門まで来た、

テ、其處にて馬より下り、添役たる郡主馬をして、重成推參いたせし由を申し込ませた。

折から師走の廿四日とて、大寒の最中である、殊に此の日は朝より、六甲風の北風が、ピュー……ピューと吹きすさびて、寒きこと云はむ方もない、左れば徳川方の諸將等は、爐に火を山のやうに燃して、暖たまつてゐる、今血判受取の使者として、木村長門守重成が來たと聞き、諸將は申し合せたやうに重成とは過る今福の戦ひに、佐竹の陣を破つて、其の老将澁江政光を討ち取つたる若武者ならずや、と云ひ難しつゝ、重成の入つて來たのを見ると、今までに見たことのない美少年であるから、さては立派な若武者と、鬼をも挫かむ大將達も、重成の美男と、堂々たる其の風采とに見惚ながら、瞳と眺めてゐる。

重成は並び居る諸大將に眼もくれず、又た會釋をもせずして、ブーツと奥へ

入る、此の時に家康どのには、上段の席に、悠然と座を構へてゐる、お傍には永井直勝、土井利勝、酒井忠勝などの、家康どの直參の重役方が、ズラリと控へてゐる、綺羅星の如くと云ふことがあるが、實に此の場の有様を云ふのであらうか。

塲馴ぬもの、心膽の不確なる者は、素よりのこと、大概な者は、嚴かなる此の席の威光に呑れて、仕舞ふのであるが、全身忠と義とより、他に何にもなき重成は、ピクともせぬ、平然としてシロリツと、家康どの、顔を眺めながら、静々と家康の御前へ進み行くを、對坐に爲つてゐた、永井直勝が、長門守殿大御所の御前で御座るぞ、御座近くへお進みあるは、御無禮で御座るぞ……と聲を掛けると、其の向ひに坐つてゐた、土井利勝が、下座にお控えあれ、作法で御座るぞ……とたしなめる、其の聲は流石に徳川家三百年の基礎を固めたる、柱石の臣だけあつて、嚴かなる聲は廣き陣中へ響き渡る。

重成驚いて下座へ下るかと思ひ氣や、沈着はらつて、二人の顔をシロリと眺めつゝ、家康どの、御前へ進み行き、ピタリと坐わりて、兩手を突き、頭を少しく下げてゐる、流石の土井利勝も、永井直勝も、酒井忠勝も、重成の剛氣なるに感服してゐる。

すると此の日の取次役なる、本多上野が、其れへ進み出で、大御所へ申し上げ奉りまする、右府（秀頼のこと）殿より、御血判拜見の御使として、此れへ進まれましたは、木村長門守重成殿に御座りますると、披露する。

『オ、長門守とか、寒冷の折から、今日の役目大義に思ふぞ、との優しい言葉がかゝる、有がたき御詫、恐れ入つて御座りますると、重成は町寧に挨拶を述べて、靜かに頭を擡げ、兩手を膝に直して、信度大御所の顔を眺めながら』

『右府殿、臣に申し付けられて御座りまするに、此の度の合戦は、實に思ひも寄らざる儀にて、如何に成り行くやと案じぬたるところ、和睦整のふて誠に

芽出度存じられ申す、右に付き大御所よりは、御誓書に御血判賜はるとのこと
 重々辱けなき儀に存ずる、就ては尙ほお言葉に甘へるやうなれども、姻戚
 の間柄なれば、御血判の御手元拜見の儀、願はれよと斯様に仰せられて、
 臣長門守重成を羞し遣はされまして御座りますると、四方に響き渡る爽や
 かなる音聲にて、臆する色は毛ほどもなく、秀頼の口上を述べ終つて、其のま
 ゝ叮嚀に一禮して、後すさりなしつゝ、下座へ下つて平伏するのである。
 大殿所を始め、居並ぶ重役の方々も、重成の主を思ふて亂さぬ作法の嚴格さに
 大く感心なしつゝ、さつても立派な若大将、健氣な心底と、口へ出してこそ
 は云はれ、心は一つであつたとみえる、其れかあらぬか、大御所は重成に見
 惚ておられたが、最も御満足なる様子にて。
 『右府の存じ寄り、満足に思ふぞ、云ふまでもなく、其方の知りやる通り、右
 府は予が婿じゃ、左れば娘の可愛ひも右府の可愛ひも、同様じゃ、此度の戦

争に、予が此の老年の身を以て、自から出陣いたせしは、考ふる仔細のあ
 つて、あつたのじゃ、然るに斯く早く、和睦が整ふて、斯様な嬉しいことは
 無いじゃ、此れにて予も満足、又た婿どもの満足であらふわい、アハハハ……
 と、大御所殊の外なる御機嫌にて、更に言葉を崩されつゝ、長門の顔をツクツ
 クと眺められて。
 『其方の父は、常陸介重滋であつたのう。
 『御意に御座ります……
 『ソム、其の面容の能く似てゐることわい、常陸介存命で居らば、何れほど
 悦ぶことであらふぞ、其方を見て思ひ出ださるゝは、常陸介のことじゃ、
 石田長束等が邪謀より、秀吉殿を勧め参らせて、露ほども苦むべきことなき
 に、誅戮された、其の節の重滋の無念さ、如何ばかりにてありしかと、思ひ起
 さるゝじやと、云はれながら、家康どの何に感ぜられてか、ハラ〜と落涙さ

れる。

「アハハハハ……年を老ると、種々の事を思ひ出して、涙もろくなるじやと眼をしばた、大きなながら、シテ其方は當年何歳に相成るかな。
「お訊ねを蒙むり、恐れ入り奉りまするが、當年二十二歳に相成りまする弱輩者……」

「ナニ……二十二歳と云やるか、すりや右府と同年じやな、さてもさても天晴なる武夫、右府は好き大將を有やつたわい、其方が今福にて佐竹の陣を破り、瀬江政光を槍玉に上げたる其の勇ましき有様を、承はつてな。さても剛勇無双と、感心いたし居つたじやわい。」

「お褒に預かり、愧しさの限りに御座りまする、なれども大御所、今福の合戦には、重成強う残念なる儀が御座りまする、其れゆえに只今にても、口惜ゆふ存じ居りまするので御座りまする。」

「ウーム……彼れほどの功名いたし置きながら、遺憾に存することありと云ふか、シテ其の仔細はと、大御所の言葉。」

「私の事この晴の御場所に於て、而も直々大御所に、言上いたしまするは恐れ入り奉りまして御座りますれども、御下問に對し、奉答仕つりませぬは、却つて失禮と存せられ、畏れ多きことながら、申し述べまするが、實は佐竹殿の御首級を、頂戴いたすことの叶ひませざる儀に御座りましたと、重成は憚かるところなく云ひ放つた。」

「アハハハハ……イヤ中々の元氣じや、武將たる者は其の位々の膽力が無ふては爲らぬ筈じやと、家康どの肝心の血判を忘れたかのごとき風情にて、重成を相手に打ち寛ぎながら、斯んな物語をして居られる。
重成は血判見届と云ふ、大役を荷擔る身、左るに大御所が、打ち寛るぎて他事を物語らるゝは、ハテ合點のゆかぬ、油断ならじと考へたるにや。」

「大御所様へ申し入れまする。右府様に於せられても、今日のこと某の使命を果し、歸城いたしまするまでは、御心配あらせられて居られませうかと、存じられまするに依り、恐れ入り奉りまして御座りますれど、御誓書に御血判下し賜はりまするやう、幾重にもお願い申し上げたてまつりますると云ふ。」

「オ、如何にも左様じゃ、右府も待ち居るであらふ、婿を幾時までも待たし置けば、舅の本意でない、然らば誓書を此れへと云はれると、畏まつて候と、本多上野が御右筆たる、曾我某の認めたる誓書を、文壺に載せ、文箱を添へて、静々と大御所の前へ直す。」

秀頼どの、室は、家康どの、息女お千の方と云はれる、常年二十一歳の盛の花である、其れ故に秀頼どの、事を婿と云はれる。

大御所は今、本多上野の、差し出だしたる誓書を取り上げて、御覽せられつ、ニツコと打ち點づかれて。

「長門誓書の文面、一應讀んで置きやと云はれて、上野が差し出すを、重成は一膝づらせて両手に受けつゝ、押し戴いて讀み終り、恭しく上野に渡し、謹んで拜見仕りまして御座りまする。」

「然らば血判いたすであらふと、家康どの、筆に墨を含ませて、諱名を記され而して血判なすべく小刀を取り上げ。」

「長門……篤と見分せよ……」

ハツ……と長門守重成、今や大事の場處と、眼打もせず、シツと家康の手許を諦視てゐる。

家康どの、小刀にて、指先を突かれたが、如何なる次第にや、思ふやうに血が出ぬので、アハ、ハ、ハ……年を老ると、血まで枯れてと云ひつゝ、其のまゝにて血判されやうとする。

重成は此處ぞと、深く決心せるが如き容子にて、シロリと左右に居並ぶ重役の

顔を眺めつゝ、其れへ両手を突きて

『大御所様へ申し入れまする、お年召されて血枯れたとの御意に御座りまする拙者は御血判、假し糺糊み居りませうとも、大御所の御血に御座りませれば、其れにて十分……又た右府様に於せられても、素より御満足に御座りまする、併りながら大御所様と、重成の言葉は重る、而して氣の勢なるか、重成の眼には一種の異彩を放つてゐる。』

此の言葉に、今し血判せんとせし家康どのの手は、膝の上に止まる長門は一層爽やかにして、重味のある音聲を張り上げつゝの。

『淀殿は、女性にゐらせられますれば兎角にお疑ひ深く、其故に恐れながら鮮やかな御血を、お注ぎ下し置かれまするやうにと云ふ、長門の威風若し拒みなげ、躍りかゝつて家康を一刀の下に、刺し殺さんず状なるより、一同は太く荒膽を挫しがれて、スワ事ぞと片啜を呑む。』

大御所は重成の其の大決心を、シロリと眺められて、ホ、笑まれ、さても文夫、實に又と得難き若武者であると、家康どのいよく感心あそばされて、如何にも淀の前へ、ウム得心いたしたと、大御所は更に指尖を深く突き、滴る鮮血を諱名の上へ注がれ、其の乾くを待つて、其れと上野に目配せをされると心得て候と、上野は其れを長門に渡す。重成之を受取つて押し戴き、肥と眺めてゐたが、聴て両手を突きて、有がたく存じまする、恐れながらお紙の御表、御明瞭に存じますると申し上げて叮嚀に挨拶して、スーツと下座へ下りつゝの。

『御血判確かに頂戴いたして御座りまする、然らば大御所様、右府様お待ちかれで御座りませうほどに、此れにて御免下さりませう。』

『ウム……尙ほ其方に申し聞けたきこともあるじや、なれども今日は此れだけいたし、又た追つて申し述ぶるであらうわい、家康其方が、今日の振舞、取

り分け美事に存じ、惚々いたしたぞやアハ、……と容子あり氣な家康の舉動に、重成は不審を抱ひたが、左あらぬ體

『左様なれば大御所様、お暇申し上げ奉りますると云ふ、ウム……随分とも身體を大切にいたし、右府に此の上とともに、忠節を盡し呉れよと云ひ置き、大御所は本多上野介正純を従え、悠々と奥の間へ入られる。』

重成は次の間まで下りて、居合す諸大將に向ひて、叮嚀に兩手を突き、威儀を正して、さて云へるやう。

『先刻見参いたせし其の砌り、聊かも御挨拶申し上げひで、方々の御前を過ぎ行きたる段、無禮な奴と、定めて思召されて候はむ、重成不肖と雖ども、其れほどの作法存せざるには候はず、併りながら、其の砌は重成、右府様の御名代、又た御血判滯ふりなく頂戴いたす其れまでは、和睦の相談成りたりと云へ、方々とは未だ激味方で御座る、左るに見参の御挨拶申し上げる

やうなることありては、右府様の御威光を損じ、二つには公事を後にして、私事を先にいたすと云ふ、怖れが御座る、其れ故に殊更に、失禮仕り申した此の儀憚りながら、御得心置かれ給はりませと云ふ。

何處までも行き届きたる長門の舉動に、徳川方の大將連は、太く感歎なしつゝ、恐れ入つたる御心掛け、一同は口を揃えて褒めそやす。

斯の如くにして長門守重成は、盡く面目を施して大阪城へ引き返したが、紫白山に於ける重成の舉動は、老練の大將と雖ども、爲し能はざるところ、是れ皆な凝り固まりし、精忠至誠の現化と云ふの外なく、此れより木村長

門守重成の名は、徳川方にも響き渡る、而して家康は此の時より、重成に惚れ込まれたのであつた。

○木村長門威状を辭す

大阪冬の陣に於る重成の武勇忠節、共に拔群である、左れば秀頼どの御感
 は申すまでもなく、淀どのも此の度は、心底より重成の忠節を感じたと見へる
 其れより引き續きに、論功行賞は行なはれて、長門は正宗の大刀と脇差とを
 添えて、武將が最上の光榮たる、感状を賜ふたのであつた、是れ實に元和元年
 の正月の中頃である。

此れに上越す武門の譽と云ふてはなき、感状を賜はつたのであるから、木村
 家の名譽は、此の上もなく、重成の光榮は亦た至極であるから、太く喜び勇
 みそふなものであるに、重成は却つて快らすと云ふ状である、片桐且元、
 後藤基次、眞田幸村等を始め、居合す諸將等、早くも重成の此の容子を見て、
 訝かつたのであつた。

重成は感状と正宗を、謹んで頂戴して我が前へ置き、其れから更に感状を取
 り上げ、改めて恭しく秀頼の御前へ差し置き、二膝づらせて居住居を直し

たのである。

秀頼も此の有様に訝かる、居並ぶ諸將も亦た訝かつて、呢と重成の容子に眼を
 注ひだ、すると重成は畏れながら上様へ申し上ますると云ひつゝ、言葉爽やか
 に。

『去ぬる冬、今福堤の合戦の砌り、某敵の大將を突き止めはいたしてまし
 て御座りましたが、其れは重成の武勇に依つては御座りませぬ、お預け置せ
 られたる、持口の軍士方が、皆な身命を打ち棄て、戦ひ給ふたに依り、勝利
 を得たる次第に御座りまする、殊に其節、後藤基次どのを始め、大野治長どの
 さては七隊長の方々が、粉骨の勞を盡され申しましたるに依り、某が幸ひ
 にも澁江政光の、首級を得ましたる儀に御座りまする、左れば重成一人の高名
 にては御座り申さぬ、然るに感状を戴き申すは、重成、潔といたし申さ
 れませぬ、其れゆへに感状の儀は、御辭退申し上げますると云ふ。

すると後藤基次が片脇より、長門どの、其の御謙遜は如何にも恐れ入つて御座る、なれどもお身の忠節武勇は、恐らく天下に認めぬものは御座らぬ、されば御感状は、お請けあそばさるゝが、宜ゆふ御座らふと云ふ、片桐も亦た基次の云はるゝ通りで御座ると云ふ。

『方々の御言葉に反し申す様に御座りますれど、御感状の義は、強て重成には御無用に御座りますると、キツパリ云ふ。

其の顔を眺めて、真田幸村は、流石に軍師と仰がれてゐる、智將だけあつて、早くも其の心底を看破してか、ニタリとホ、笑みながら、御無用と云はるゝ其の仔細はと、故意らしく訊ねる。

『左ればで御座る、自然他の主君へ仕えまする場合とか、又は子孫に至つて、其の先祖の高名を誇りて、武士の面目といたしまする場合には、感状ほど大切な物は御座りませぬなれども、重成に於きましては、二君に仕へまする念慮は、

毛頭御座りませぬ、左れば御感状は御無用に御座りまする、又た重成の子孫を我が君に於せられては、如何てか見放し給ふことの御座りませうや、左れば又た子孫の爲めにも、御感状は御無用かと存じられまする、加之ならず重成は、君へ御奉公つまつかるべき筈の者にて、御座りますれば、何處までも忠戦仕りまするが、道にして、大小の功名のごときは、珍らしからず、是れ臣たるもの、當に盡すべき道に御座りまする、左ればかたゞ御感状は、御無用に願ひとう存じますると、云ひ來たつて、重成は何にやらむ俄かに無量の感想に打たれてか、涼しき两眼には時ならぬ涙の露を漂えつゝ、音聲さへも曇らせて

『我が君の御武運だに愈々開かれ給はゞ、重成も共に武運に榮えて、身に餘る光榮に誇り申すべし、又た恐れ多きことながら、萬々一我が君の御武運な盡させ給ふ様なることの御座りましたる節には、重成亦た黄泉へ御供つかまつり申し、足らざる忠節は冥途に於て、盡し奉りたくと存じ申すと、云ひ終つて

思はずハラ〜と落涙した。
一座は森として、宛然大森林中に在るがごとく、秀頼どのを始め列席の面々皆な感涙に咽せふ。

斯の如くにして、重成は感状を返上したが、此の時は徳川方に於て和睦の條件たる外濠を、残らず埋め終りて、更に其の條件ならざりし、内濠までをも残らず埋めて了ひ、以て飽までも豊臣方を壓迫した、其れで重成は又たもや、徳川方と兵端を開かれれば爲らぬ運命に立ち至るに相違ない、而して其の戦端を開く時こそ、遺憾ながら豊臣家の、御武運が盡る時なりと看破したので、さては自分の決心のほどを、其れとなふ一同の方々に告げ知らせたのであつた。

○板倉伊賀守重成の忠節に泣く

左右する中に元和元年三月となつた、而して關東方の大阪に對する仕方が、

いよく面白くない、即ち事實上大阪は、徳川氏の手の中の物と爲りかゝつて来たので、心ある將士方は、秀頼に同情して、怒り出し、徳川氏の不徳を責むべしと云ふ、淀君實に然りとあつて、又たもや兵を天下に募つたところが忽にして十二萬の兵を得た、此に於て又たもや、兵を擧げることには決した。此れが即ち大阪の夏の陣であつた。

大阪の興廢此の一舉に在りと云ふ、大難關に際しながら、淀君は相變らず、大野治長や、長曾我部盛親等の、取るに足らざる意見のみを用ひて、片桐且元、眞田幸村、後藤基次、木村長門など、精忠の士の献策は悉く退けて採用せぬ、豊臣氏滅亡の悲運や廻り來たれるとは云へ、さつても憂てきの限りなり。

木村長門は今しも我が部屋に在りて、主家の行末を思案しながら、時々長き溜息を吐いてゐた、ところへ召使の侍女が次の間より、板倉伊賀守勝重

様が、御前様に御意得しと仰せられて、御越に御座りまする。
 『ナニ……伊賀守殿が、予に會たいと云ふて、京都より態々御座つたと、
 ハテ心得ぬ時節柄……殊更に……と、重成不審がつたが、兎も角も此れへお
 通し申しや……』

互ひの挨拶済みたる時に、重成どの、某が今日、態々罷り出ましたは、些と
 お身に御密議ないたし度と存せられました……』

『オ、左様で御座つたかと、重成は密議と聞きて、傍に侍つてゐた女に、
 遠慮の儀を申し付ける。』

『密議と申すは、勝重大御所より、特に承はるたる御諚を、お身に傳えん
 とて、御座る。』

『ハテ……訝かし、如何なる御諚に御座りまするか、兎も角も仰せ聞けられて
 下さり申せ。』

『お身の御父常陸介殿が、御無念を懐え、涙を呑むで、御生害あそばさ
 れたことは、お身能く御存じて御座らふ。』

重成は板倉伊賀、異なことを云ふと思ふたが、左あらぬ體にて、如何にも其の
 儀は母より云ひ聞かされ、石田長東等の奸言より出でたる父の横死と子供心
 にも石田長東等を、恨み居りましたが、併し兩人とも關が原にて衰れ無情の最
 後……』

『其の兩人に、無情の最後を遂げさせたは、全く大御所の御力で御座らうが
 な、左れば大御所は、お身の父の仇を報ひ給はれたる、お身に對しては大恩
 人、この大御所の大恩を、お身は何に依りて、お報ひ申し上げやうと思はるゝ
 かな、此の儀先づ承はりとう御座る。』

『さても改ためて意外なお訊れを蒙るものかな、如何にも其の恩義のお報ひ
 は、右府様に及ばずながら、忠節を勵み居りますれば、此れにて十分かと存じ』

られます、と申すは、右府様は大御所の御婿君……申さば御一家中、其の御一家へ忠節を勵み居りますれば、是れ大御所へ忠節を勵み居るも同然……と云ふを皆まで聞かず。

「其れにて御身の御心底、能ふ明つて御座る、就ては勝重一つの望が、お身に御座るが、お聞き入れて下されぬか。」

「如何やうなる義で御座るか、先づ仰せられひ。」

「實は大御所には、昨年の暮茶白山の陣所に於て、初めてお身に會れてより以來、お身の忠節と武勇とを、強うお慕ひあそばされて、此の度某に……と云ひ來たるを、重成思はず容を正して。」

「何んと云はるゝ、其れでは大御所には、重成を關東方へ附けと仰せられるので御座りまするか、と、云ひ終つて顔色を變へた。」

「仰せの通りで御座る、此れは勝重が勝手の言葉に御座れど、お身も能つく御

存じの通り、只今の御城内の御有様、淀どのは彼の通りの御不行跡、右府殿は只だ柔順いと云ふのみにて、一國一城の主として、多くの臣下を召し使ふ御器量と云ふては更になく、且つ又た淀どのお傍には、大野治長、長曾我部盛親などの、姦佞の徒が居る、左れば豊臣家の前途は、能く視え透て居り申す、君子は己を知る者の爲めに死するとかや、お身の賢明を以てしてと、云ひ來たるや、長門は沸然として怒りの顔色に、血を迸らせながら。

「伊賀どの、過言で御座らふぞ、控え召されッ……大喝一聲叱り飛ばしたから流石に名智の伊賀守も驚きつゝ。」

「すりやお身不承知と云はるゝ……」

「素よりのこと、徳川方には主の急を見て、他へ之く不忠者澤山に御座らむも、豊臣家には、左様な者薬にいたしたくもおはさぬわい、右様なること大御所の御誠意より出でたとあつてみれば、家康どの、お年の勢でか、さても

「お心が鈍り申したな、右様の御相談ならば、重成再び聞き参らざる耳持ち申さぬに依り、疾く歸られひッ……と怒鳴り飛ばされて、流石の伊賀守も返す言葉なく、重成の天晴なる精忠無二に感じつゝ、そのまゝ面目玉を踏み潰して歸つて行く。」

左右する中に軍備は彌々整ふ、片桐、真田、木村、後藤其の他七隊長の面々等、屢次御前會議を開きて、種々と豊臣方に有益なる策略を述べたのであるが、頑冥なる淀君は、その自分が愛し切つてやる、大野治長や、織田長益、さては長曾我部盛親等の云ふことのみを用ひて、一つも精忠の士の献策を採用せぬ、斯の如くにして、五月と爲り終に大阪夏の陣の幕は開かれたのであつた。

○心血送りし烈女の遺書

愈々夏の陣の幕が開かるゝや、重成は可愛の妻尾花を召して、此の度の合戦は、實に豊臣氏の興廢に關すること、左れば御歴々御一同には、心を盡してはかりごと

謀を授けらるゝなれども、淀殿に於せられては、一つも御採用あそばされぬ、是れ御武運のお盡と推し奉るより、他に詮なし、左ればお身も豫じめ萬一の時の覺悟こそ、肝心、夢忠義の二字を忘れ給ふなよと、其となく優しゆふ討死の覺悟をホノめかす。

美人の名は娘の時代に唄れたること、今は賢婦人の名を以て、大阪城内に匿れなき、木村長門が室の尾花、夫より云ひ聞かされたる教訓の、身に泌みて、口にも云はず、色にも現はされども、最後の分別は早くも、心の底に定まつたのであつた。

ところが此の二三日、夫の重成頓と食事が進まない、尾花は其れを氣にして、今しも長門が、御前會議より下り、休息してゐる處へ、靜々と出で來

たりて、夫の顔を優しゆふ眺めながら。
 『我が夫には、一兩日以來、御食事が進まされぬやう、拜し奉りまするが、若しや落城のこと、お氣に障られて、御座りまするか。』
 問はれて重成はいぢらしの妻やさしの妻と、尾花の顔を眺めて、ニツコリと最後の愛嬌にやありけむ、ホ、笑みながら。
 『ようぞ訊れ給ふた、なれど全く以て左にあらず、昔後三年の戦にな、確か瓜割四郎とか申せし、大の臆病者があつた、其れがな、朝の食事を濟ませたばかりの時に、敵に頸元を射られたが、其の疵口より食事が出て、死恥を曝せしとか聞き及ぶ、身許も大方明日あたりは、敵に首を取られなむ、其の節死體の醜ふては、武士の辱恥、大阪方の名折と、斯様に存じて、さてこそ食事を殊更に慎み居るのじやわいアハ……アハ……アハ……アハ……と優しゆふ笑ふてみせるものゝ、此れが妹背の訣かと思へば、長門の勝は千

々に絶るゝ思ひなり。

『オホ……オホ……オホ……左様で御座りましたか、左様とは存せぬ女の淺慮さ、其のお言葉を承はりまして、此の様な嬉いことは、此の世にモウ御座りませぬと、喜びの色を顔に漂えて、見するものゝ、尾花の心の中にも亦た此れが今世にてのお顔の見納めかと、流石に愛情の泪は瀧のごとく進しつてゐるのである。』

折から聞ゆる初夜の時計、左様なれば我が夫、お先へ寢ませて戴きまする、御緩り御休息あそばされませと、餘所ながらの暇乞か、其れかあらぬか後は無言、頭を下げつゝ、袖を嘴へたまゝにて、寢室へ行く。

さてもいぢらしの妻、健氣な女房と、重成も愛情に綻されてか、尾花の後姿を諦視ながら、ハラ／＼と血の泪を思はず落したが、ア、我れながら不覺の泪と、氣を取り直し、心を洗つてゐる中に、二更の時計は打つた、時

しも重成が部下の大將松原某と云ふが入り来たつて、出陣の用意残りなく、
 整ふて候と、云ひ棄てて出で行く。
 重成は今宵三更を合圖に、出陣する筈であるから、物の具着け、妻にも其と
 暇乞せんものと、尾花の寢所へ入つて行くと、ブーンと名香の香氣が鼻をつ
 く、ハテ訝かしと思ひながら、進み寄つて見ると、コハ如何に、尾花は褥の
 上に正しく坐り、父の頼包より貰ひ受けて、肌身離さず所持してゐた九寸五分
 にて、美事に咽喉笛をかき切りて生害してゐる。
 『オ、出来した、天晴と、枕頭へピタリと坐り、兩掌を合せて南無阿彌陀佛
 ……と云ひつゝ、片脇を見れば、机の上に香を焼き、其の向に我が兜が
 置かれてある、而して其の前に遺書がある、重成靜かに取り上げて、封を開
 けば。

一樹の蔭、一河の流れ、是れ他生の縁と承はり候にこそ、そも一昨年の頃

よりして、借老の枕を爲し、只だ影の形に添ふがごとく、思ひまゐらせ
 思はれまゐらせ候、承はり候へば、この世限の御催しの由、蔭ながら
 嬉しく存じまゐらせ候、唐の項王やらむは、世に猛き武夫なれど、虞氏の
 爲めに名残を惜み、木曾義仲は、松の局に訣を歎ぬるとやら、されば
 世に望み窮りたる妾が身にては、せめてお身が御存生の中に、最後をい
 たし、死出の道とやらにて、待ち上げまゐらすべく候、必ず必ず秀頼
 公が、多年の海山の御鴻恩、御忘却なきやう、頼み上げまゐらせ候、懐か
 はしき母上様に、先立ちまゐらす罪、恐ろしゆふは候へども、お許し
 たまはりてこそ

讀み了りて重成は、莞爾と笑み、天晴なる心掛け、辱ない嬉しいぞや、重
 成もお身の後を追ひ、三途とやらの川を共々に、手に手を取つて渡らふほどに
 暫し待つてぬやと云ひつゝ、兜を取り上げれば、内に香るゝ名香の……ソム

……さては強う心を寵めて呉りやれたな。

○木村重成名譽の最後

此にて心残は更に無し、イザ花々しく最後せむと、重成は一萬有餘の軍勢を率ゐて、眞田幸村の後を追ひつゝ、大和口へ攻めて出た、大和口には藤堂高虎、水野勝成、井伊直孝、伊達政宗の諸將が、徳川勢の先鋒であつたが、幸村の軍略にかゝて、大和に破れた。

此の時に木村重成は、井伊直孝と若江堤に於て激戦を爲し、直ちに直孝が前軍を討ち破つた。

重成は勢ぬに乗じて、槍を振ひつゝ躍り出でたる、其の勢ぬに、敵は仰天して、入り亂れた、重成此ぞと切り込んで、伊井直孝が部下にその者ありと聞えたる大將、山口重信を討ち取り、敵兵四十人餘りを斬り斃したが、折か

我が部下の兵士は、残り少なになつてゐた、且つ未明よりの働きに、重成太く疲れたから、後の方の丘に登つて、槍を杖に一息入れてゐると、大將を討ち取られたる直孝の軍勢は、更に新手の兵を率ゐて、重成を見掛つゝ攻め寄せて来た。

此の時に重成の部下は、二十人ほどよりなかつた、而も其の二十人は悉く疲れて、ガタ／＼であつた、且つ重成も身に六七ヶ所の傷を受けてゐる、此の容子を見たる、井伊軍の大將飯島某と云ふが、大音聲に。

「其處におはする御大將は、木村長門守重成殿にては御座らずや、最前よりの御働き、天晴れで御座る、見ぬまぬらすれば、殊にお疲れの容子、兎も角も城へ引き還されて然るべしと云ふ。

なれども重成は、いつかな聴す、豊臣方には敵に後を見するが如き、卑法者は御座らぬ、イテ進まれひ、木村長門が武勇のほど、御見に入れむと、重成

は槍を振ひつゝ、敵中へ躍り込み、又たもや立に七八人を斃したが、如何に剛勇の武將といへども、衆寡は素より敵せず、終に直孝が部下の、菴原助右衛門の槍にて刺れ、安藤彦四郎の爲に、首を落され、此に武將の龜鑑を遺して、木村長門は花々しく戦場の露と消え、尾花の後を追ふたのである、時に年二十有三……頃は元和元年五月六日未の刻下る時とかや……

重成は斯の如く、壯烈なる最後を潔して、武士道の精華を發揮し、武將の龜鑑を遺して、軍神と尊らる、而して其母右京の局は、如何されしか、大阪落城と同時に、大藏の局と共に、生害して秀頼母子の殉を爲し、亦た烈女の龜鑑を後世に遺したのである。

重成母子が斯のごとく、死後の光榮を輝やかせしに反し、長曾我部盛親は、城を逃れて四條河原に磔の醜態を曝し、其の室の山瀬は、城を亦た抜け出で、大和路とやらにて、ノタレ死を爲し、烏や狼の腹へ葬むられたとか傳

えらる、是れぞ所謂る天の制裁なるか、ア……

木村長門守 (終)

明治四十四年八月十日印刷
明治四十四年八月廿日發行

木村長門守

定價金貳拾五錢

著作者

講談文庫編輯部

大阪市東區淡路町三丁目二一六番五號

發行者 堀 徳 次 郎

大阪市東區御後町五丁目八番五號

發行者 岡 田 菊 二 郎



發賣所

發賣所

大阪市東區御後町四丁目
電話番口座大阪九九〇八番
振替東四二六八番
大阪市東區御後町五丁目
電話番口座大阪五二二八番
振替東五一七六番

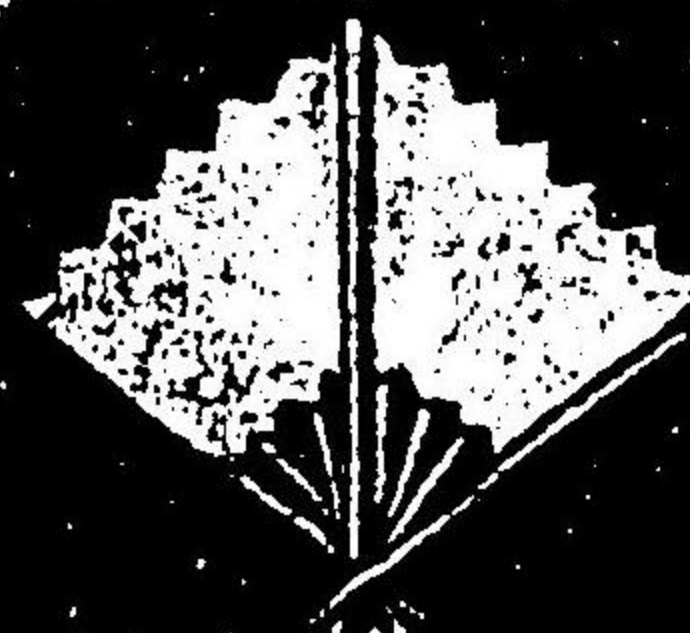
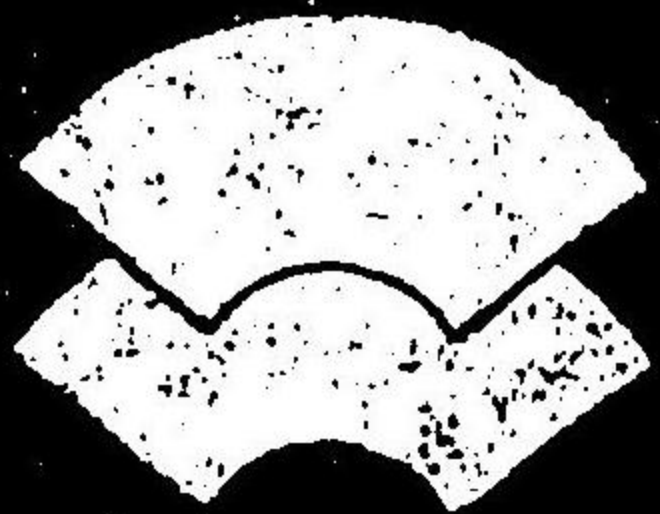
金正堂書店

文祥堂書店

講談文庫續刊目錄

一 休禪師
水 戶黃門
赤 垣源藏
曾 呂利新左衛門
堀 部安兵衛
西 郷隆盛
大 石良雄
後 藤又兵衛
大 高源吾
錢 屋五兵衛

曾 我兄弟
直 江山城
松 平信綱
堀 團右衛門
佐 倉宗五郎
柳 生飛彈守
尼 子長四郎
木 村長門守
關 口彌太
大 岡越前守



266

460

